欠ノ上遺跡発掘調査報告書

岐阜県可児町教育委員会

教育委員会

① 欠ノ上遺跡　② 長塚古墳　③ 野中古墳　④ 西寺山古墳　⑤ 御嶽古墳　⑥ 白山古墳

遺跡付近の航空写真

序

雇用促進事業団が可児町内に宿舎を建設することになり，町商工観光課は数か所の候補地のなかから生活環境などを考え，中恵土欠ノ上1750番地の5に建設地を決定した。町教育委員会は，同敷地内に柿の木塚古墳が存在することから，県教育委員会文化課へ連絡し，係官を派遣していただき現地調査を実施した。協議の結果，他の代替地が種々な理由により困難なことから，同古墳を中心に発掘調査を行い，記録保存を図ることとなった。

調査は，用地買収などの都合から，昭和53年12月から開始され，昭和54年3月迄に完了した。調査時期は冬季で，日照時間も短かく，降霜によって毎日午前中は泥濘で作業は困難をきわめ，直接作業に携っていただいた地元の方々の苦労にまず御礼申し上げます。ここに，出土した貴重な資料を中心に紹介し，今後の研究の糧としていただければ幸いであります。

昭和54年3月

可児町教育委員会

教育長　金子栄五郎

例　　言

1．本報告書は，岐阜県可児郡可児町大字中恵土字欠ノ上1750番地の5に雇用促進事業団により，雇用促進住宅可児宿舎建設の敷地造成に伴う埋蔵文化財調査を可児町教育委員会が実施した調査報告書である。

2．調査は昭和53年12月1日より，昭和54年3月31日までにわたって行った。

3．発掘調査にあたっての調査員は，中島勝国と亀谷泰隆である。

4．出土品は，可児町教育委員会で保存する。

5．なお，本書を書くにあたっては，名古屋大学考古学研究室　大参義一氏を初め多くの方々から指導を受けた。

欠ノ上遺跡発掘調査調査員構成

可児町教育委員会　教育長…金　子　栄五郎
可児町教育委員会　社会教育課長…山　口　博　司
調査主任 岐阜県考古学会員…中　島　勝　国
調査員　岐阜県考古学会員…亀　谷　泰　隆
県文化課……波多野　寿　勝
可児町文化財審議会委員……佐　藤　鎬　平
〃　……金　子　一　郎
〃　……森　川　益　三
〃　……続　木　　正
可児町文化財審議会委員……安　藤　寿　作
〃　……平　田　録　郎
〃　……稲　垣　雄之助
〃　……奥　谷　一　勝
事務担当 町社会教育課係長…奥　村　雄　司
事務担当 町社会教育課文化係…三　宅　高　明
調査補助員……可　児　貞　子
〃　……渡　辺　三千子

目　　次

巻頭　遺跡付近の航空写真
序
例言
目次

Ⅰ　欠ノ上遺跡付近の地形と歴史的環境 …… 1
Ⅱ　発掘調査に至る契機と経過 …… 3
Ⅲ　層序 …… 7
Ⅳ　遺構と出土遺物 …… 7
　1　縄文時代遺物 …… 7
　2　弥生・古墳時代の遺構と遺物 …… 10
　　(1)　住居址と出土遺物 …… 10
　　(2)　柿の木塚古墳 …… 20
　　(3)　溝状遺構 …… 22
　　(4)　その他の出土遺物 …… 24
　3　歴史時代の遺構と出土遺物 …… 30
　　(1)　中世墓 …… 30
　　(2)　土壙 …… 33
　　(3)　溝状遺構 …… 34
　　(4)　その他の出土品 …… 35
Ⅴ　結語 …… 36
Ⅵ　図版

I　欠ノ上遺跡付近の地形と歴史的環境

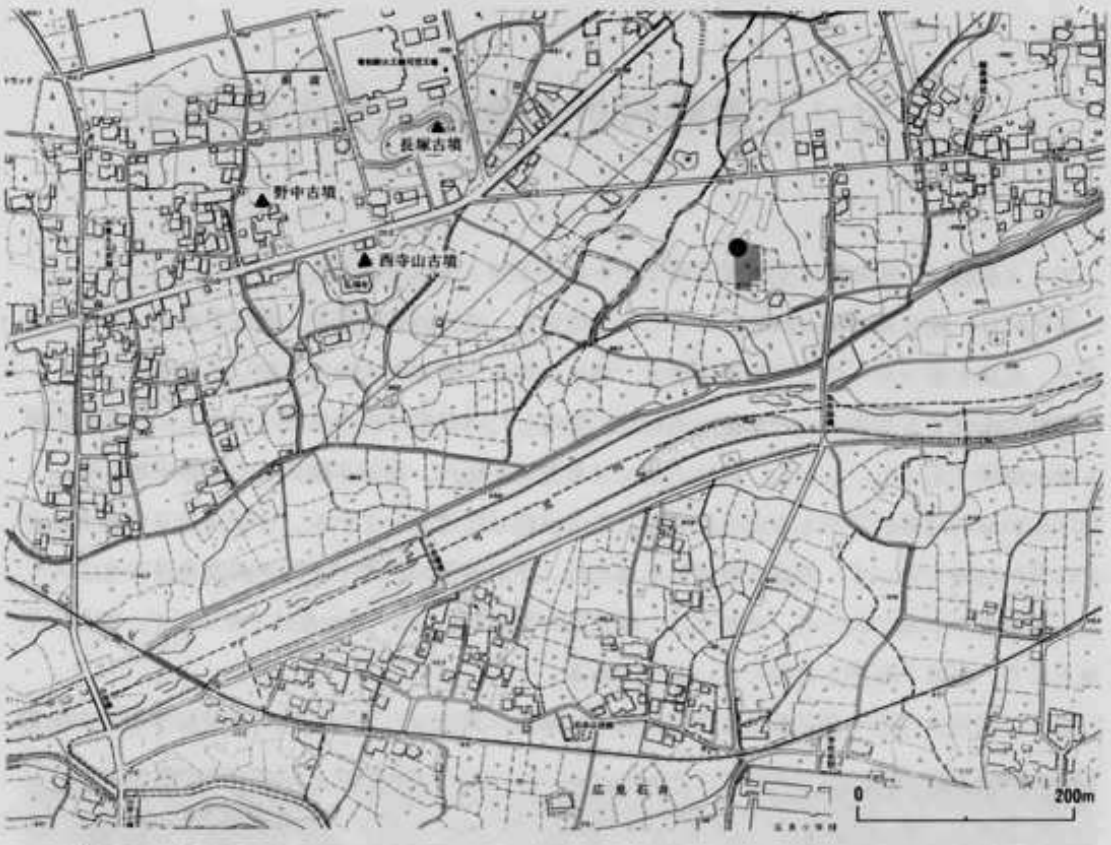
欠ノ上遺跡は，岐阜県可児郡可児町大字中恵土字欠ノ上に所在する。

可児町は，岐阜市の東方約30kmのところに位置し，東は同郡御嵩町，南は多治見・土岐の両市と，北は木曽川をへだてて美濃加茂市，西は山続きで愛知県犬山市と接している。

遺跡の所在する中恵土は，美濃加茂盆地に発達した河岸段丘の中位段丘にあって，水利が悪く畑か森林であった。しかし，段丘の南には可児川が流れ，同川が開折した沖積平地に接し，北は約15mの比較的差がある段丘崖をなして下位段丘に連なっている。中位段丘は中恵土付近では幅約80mであって，遺跡の所在した地点は，上野集落の西端で西隣の前波集落の東にあたる。両集落の中間にあって，近年迄は，両集落の間約400mは，畑か森林であったが，戦後住宅地となり，集落と集落と連担していきつつある。

過去に同地点付近で長年農耕に携った人々に聞取り調査をしても石鏃・打製石斧などの採集

挿図1　遺跡付近の地形図（5万分の1）　1欠ノ上遺跡　2宮之脇遺跡　3長塚古墳　4野中古墳　5西寺山古墳　6御獄・白山古墳



挿図2　遺跡付近地形図

した例は聞かれなかったが，段丘の南約100mには可児川が流れ，比高差約5mの段丘崖の下は可児川の開折した沖積平地であるので，原始・古代人が居住するのには比較的好条件な所であると考えられる。

原始時代の事物には乏しいが，古墳時代になると調査地点内の柿の木塚古墳を始め，北西約300mには国指定史跡の長塚古墳・三角縁神獣鏡を出土している野中古墳・両古墳の中間に西寺山古墳のいわゆる前波の三つ塚といわれる，地方にはまれな大型の前方後円墳が存在し，北東には上野稲荷山古墳（円墳）を中心とする古墳が点在している。歴史時代に入ると近くを東山道が通っていたといい，奈良・平安初期は「亘理郷（わたり）」の一部であり，荘園制の時代には，荏戸荘の一部であり，荘園時代末には，同荘園が上・下に分かれたが，同地点は上荏戸荘内に入っていた。近世に入ると，この中位段丘の荏戸荘の村は，ほとんどが幕府直轄領となった。

II　発掘調査に至る契機と経過

本書に記録する欠ノ上遺跡の発掘調査は，雇用促進住宅建設にともなう行政発掘による。県が可児地区農村地域工業導入実施計画に基づいて計画した可児工業団地は，昭和49年３月，北姫の丘陵地に造成を完了し，現在20社，約800人の従業員を擁している。計画によれば，大小合わせて29社が進出し，総従業員4,000人を数える有数の工業団地となるため，町では，従業員の住宅の整備充実を計画，昭和49年頃より雇用促進事業団に雇用促進住宅の設置を陳情してきた。土地の形状や道路，上水道，排水，小中学校等の公共施設，病院等の生活環境の諸条件から，中恵土欠ノ上に適地を求めて誘致した結果，昭和53年３月，同地に５階建２棟，計80戸の雇用促進住宅の建設が決定した。

しかし，その後，住宅建設予定地に，通称「柿の木塚」と呼ばれる古墳が１基存在することが明らかとなり，促進事業団の窓口にあたる町商工観光課，町教委，事業団の間で，埋蔵文化財の保護に関して協議がなされたが，前述のように他に適地がないことから発掘調査を行って記録保存を図ることになった。昭和53年春，調査にともなう事前の分布調査により，促進住宅建設予定地7,219㎡全域に，土器片（土師器・須恵器片），山茶碗片，打製石斧が散布することが明らかとなったが，埋蔵文化財に対する協議対象は，先の古墳１基のみであり，古墳１基の調査費が補正予算で計上されたのみであった。当初同年８月に調査の予定であったが，種々な理由で開始が遅れ，同年12月８日，発掘調査を開始した。調査の進展とともに，予想されていたように柿の木塚周辺は集落址であることが判明したが，調査費の不足と，雇用促進事業団への用地引渡しの関係上，敷地7,219㎡の約８％，600㎡を調査できたのみで，昭和54年１月18日現場での作業を終了，検出された四軒の住居址を除いて，集落址の追求は結局断念せざるを得なかった。

開発に伴う埋蔵文化財の保護対策は勿論，発掘調査に先だって行われる事前調査のあり方に対し，諸々な問題をうきぼりにした調査でもあった。

調査方法

次に，調査方法とその調査経過の概略を述べることにする。

雇用促進住宅建設予定地は，総面積7,219㎡の面積をもつが，そのほぼ中央に位置する柿の木塚が調査対象となっていたため，まず主体部の検出に主眼をおいて発掘区域を設定した。立木伐採後の地形観察で，墳丘存在部は旧墳丘の約$\frac{1}{10}$程度であり，また，墳丘ボーリングの結果に

おいても主体部らしき石組が見あたらなかったことから，すでに主体部付近は削平され畑地となっている可能性が強かった。地形測量により，墳丘残存部東南側が約50cm周辺より高くなっており，削平後の畑地に埋葬施設基底部が検出されることも十分予想されたため，ここに1辺4mのグリットを設定，12m四方を全面発掘することにした。グリットは，東よりＡＢＣとし，南より1～3番と番号をつけ，Ａ1グリット等と呼ぶことにした。墳丘の大きさ確認のためには，Ｃグリット列と2グリット列をそれぞれ南北，東西方向へ，幅1.5mで延長し，葺き石，周溝等の検出につとめることにした。墳丘は，葺き石の存在や，墳丘上で行われたと思われる埋葬後の葬送儀礼を追求すべく，残存部表土を除去することとしたが，結局，3グリット延長上の南側を除去したのみで，期間的に断念せざるを得なかった。その後，主体部追求のためのＢ2グリットから住居址のコーナーが検出されたため，集落址の調査も合わせて行うことにした。先のグリット番号を尊重して，東へは，マイナス（－）を付けてＡＢＣ……とし，南方へは，同じくマイナス（－）をつけて１２３……とグリットを延長した。

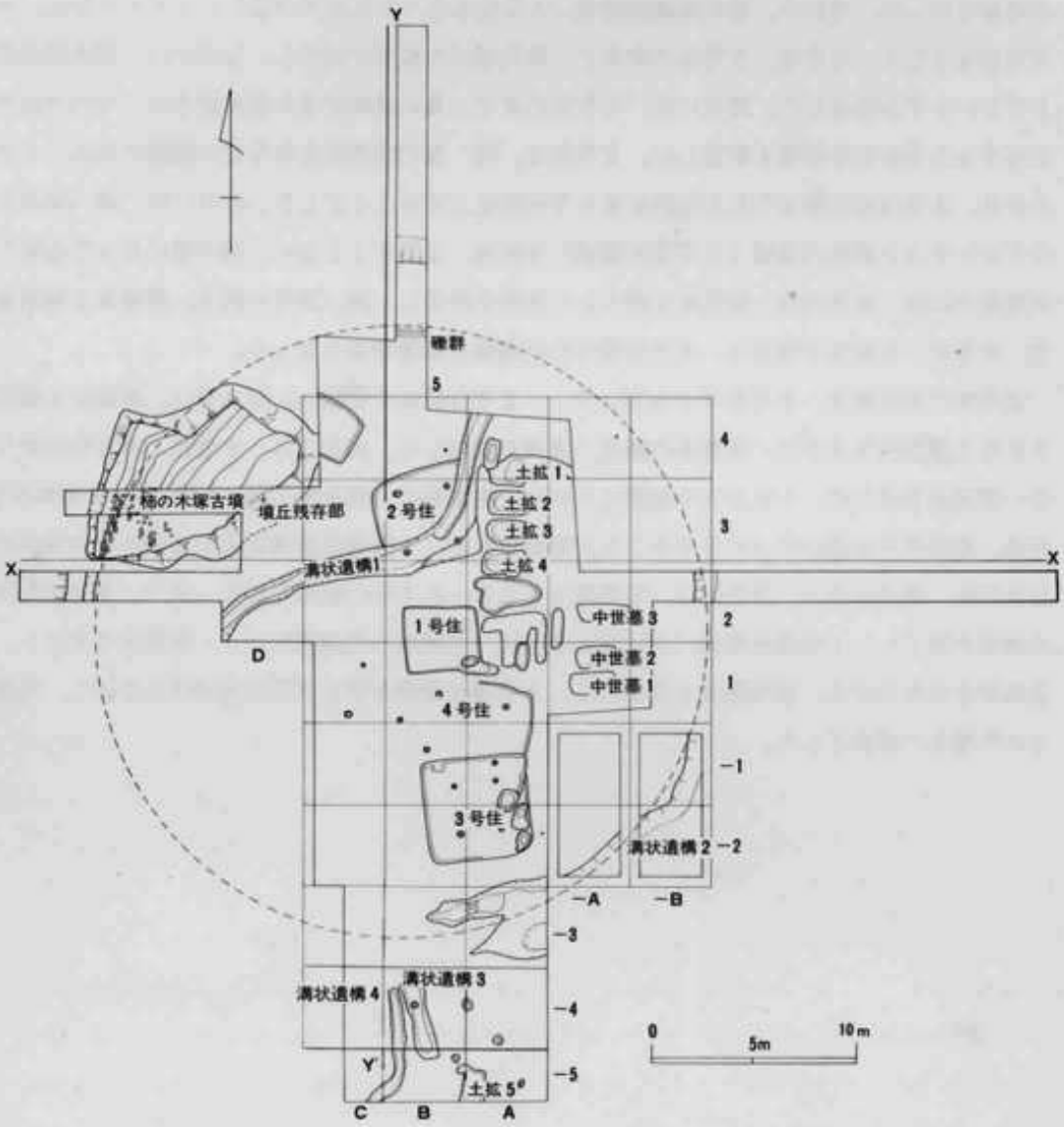
発掘調査の経過

昭和53年12月8日，現場での発掘作業を開始する。柿の木塚古墳墳丘の立木伐採の後，墳丘とその周辺の地形測量を行い，翌日，墳丘残存部南東にグリットを設定して，Ｂ2，Ｂ3，Ｃ2，Ｃ3の4つのグリットから掘り始めた。表土層の下は土器片を多量に含んだ黒色土となり古墳埋葬主体部はなかなか検出されなかったが(結局，主体部を検出することは出来なかった)，12月13日，地山に達したＢ2グリットで，住居址のコーナーらしき掘り込みが検出された。12月14日には，床面と思われる所より，土器片がまとまって出土し，方形のプランを持つ住居址と断定，1号住居址とした。1号住周辺のグリット拡張とともに，古墳墳丘の調査を開始し，3グリット列から南の墳丘表土除去作業を行い，葺き石を確認して19日に実測作業を終了した。古墳基底部の規模，周溝の有無，その他，調査区全体の遺構確認のためのトレンチは，16日に東トレンチを，17日には北トレンチを設定して，それぞれ掘り始めた。18日には，各トレンチとも作業を終え，土層断面図を作成した。

集落址追求は，18日に1号住の南方A－1，A－2，B－1，B－2グリットを掘り始めた。A－2グリットで土器口縁部が検出され住居址の存在する可能性が強まったため，平板で出土遺物の地点を落としながら掘ることにした。19日には，1号住の北方Ｂ4グリットから，高坏1個体，器台2個体がほぼ1か所から検出され，新たに住居址が存在するものとわかった。2号住居址として，周辺を拡張することにした。古墳1基の予定で調査を開始した関係上，省力化のためブルトーザーを導入して，調査区東方の表土層除去作業をこの日行ったが，かえって遺構の確認が困難となり，機械力導入の危険性を痛感した。

12月20日，墳丘断面観察用のトレンチを，3グリット北壁に沿って入れるとともに，1号住の実測を行った。翌21日，墳丘断面図作成，1号住南より住居址の周溝らしきものを検出，3号住居址とした。2号住，3号住の検出と，周辺地区の拡張を続行し，22日には，調査区南端までトレンチを延長した。25日には，1号住の東で，集石遺構が3か所検出され，中世の陶片を出すところから中世墓と断定した。3号住は，後，他の住居址と切り合い関係にあることがわかり，3号住北に検出された住居址を4号住居址とすることにした。27日には，南へ延長したトレンチより溝状の遺構（3号溝状遺構）を検出，土器片とともに，溝の壁にそって石庖丁が発見された。正月の為，作業員を導入した発掘を終了し，28，29日の両日，調査員と補助員で，3号住・4号住の実測と，正月休暇のため遺構の保護措置をとった。

正月明けの作業は，1月8日から行った。 2号住居址を完掘し，翌9日に，床面から検出された土器の取り上げと，中世墓の精査，実測を開始した。10日には，3号住，4号住の切り合い関係追求のため，トレンチを床面に入れた。中世墓は，実測終了後，長軸で切って断面図を作成，集石の下は浅いピットとなることが確認された。3号溝状遺構周辺の拡張をその後進め12日には，高坏が出土，16日には，山茶碗をともなった土拡が検出された。17日，2号住周辺の調査を終了し，1号溝状遺構，土拡群とともに，住居址の実測図をとり，午後よりテント，道具類を引き上げる。機材撤収と平行して，3号溝状遺構を中心とした実測図を作成し，現場での作業を一応終了した。


Y
X
X
柿の木塚古墳
墳丘残存部
2号住
溝状遺構1
土拡1
土拡2
土拡3
土拡4
中世墓3
中世墓2
中世墓1
1号住
4号住
3号住
溝状遺構2
溝状遺構3
溝状遺構4
土拡5
D
C
B
A
Y'
0
5m
10m

挿図3　全測図

Ⅲ 層　序

土層観察と遺構確認のため，２グリット列，Ｂグリット列をそれぞれ延長し，幅1.5mのトレンチを設定した。

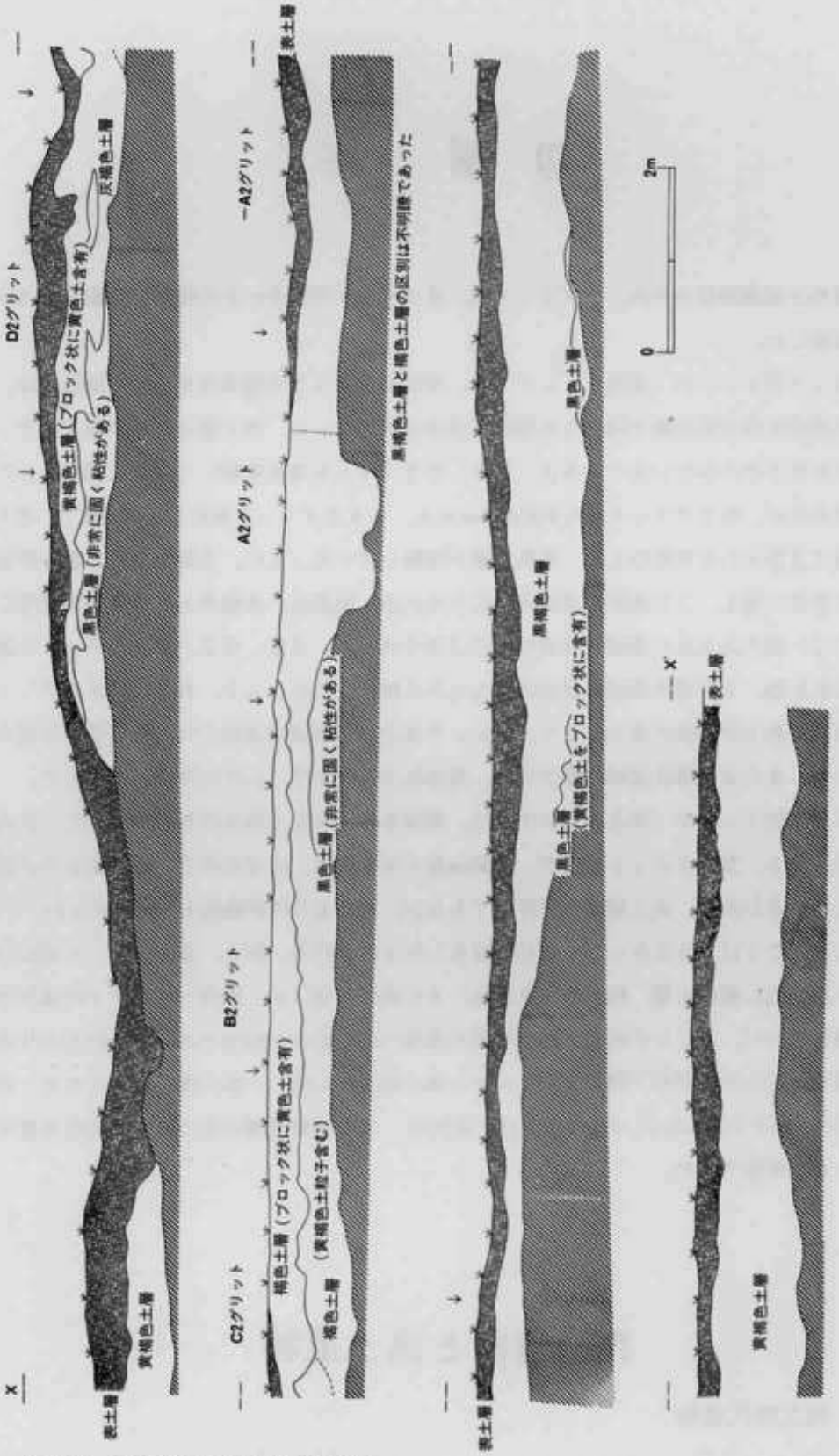
２グリット列トレンチ（東西トレンチ）は，挿図４のような土層状況をなし，地表面は，柿の木塚古墳墳丘残存部西側で低くなる他は，ほぼ水平であった。表土層は，所謂耕作土で，黒味を帯びた粘りけの少ない土で，Ａ２，Ｂ２，Ｃ２グリット地区を除いて全面に認められた。古墳墳丘部分は，Ｄ２グリットから西約3.5mから，－Ａ２グリット東約３ｍの地域で，表土層の下に盛土と思われる黄褐色土層，褐色土層が堆積していた。また，土器を多量に含む非常にしまった黒色土層も，この地区に地山の上にみられた。地山は，赤褐色から黄褐色の非常にしまった土で，掘り込まれた遺構を検出するには楽であった。Ａ２，Ｂ２，Ｃ２グリットで遺構が検出された他，２号溝状遺構の皿状の落ち込みも検出された。Ａ２，Ｂ２，Ｃ２グリットの遺構では，黒色土が遺構の復土となり，トレンチ東方の２号溝状遺構では，黄褐色土が復土となっていた。また２号溝状遺構の東からは，黄褐色土層中より，白瓷短頸壺が出土した。

Ｂグリット列トレンチ（南北トレンチ）は，挿図５のような土層状況をなしていた。地表面は，Ｂ２，Ｂ３，Ｂ４グリット付近が，約50cm高くなる他は，ほぼ水平で，この高まりは古墳墳丘のためと思われる。表土層は，耕作土であるが，地山までの黄褐色土と区別がつきにくく，断面図に示すことはできなかった。墳丘の存在したと思われる，Ｂ３，Ｂ４グリット地区では，黄褐色土層の他に褐色土層，粘土層がみられ，また地山の上には，東西トレンチと同様黒色土層が堆積していた。トレンチ北方には２号溝状遺構の落ち込みが検出され，地山付近より須恵器広口壺が流れ込みの状態で検出された。また溝の斜面からは，一部に礫が検出された。古墳の葺き石の一部かと思われる。トレンチからの遺物は，２号溝状遺構の北より，黄褐色土層中から凹石一点が採集された。

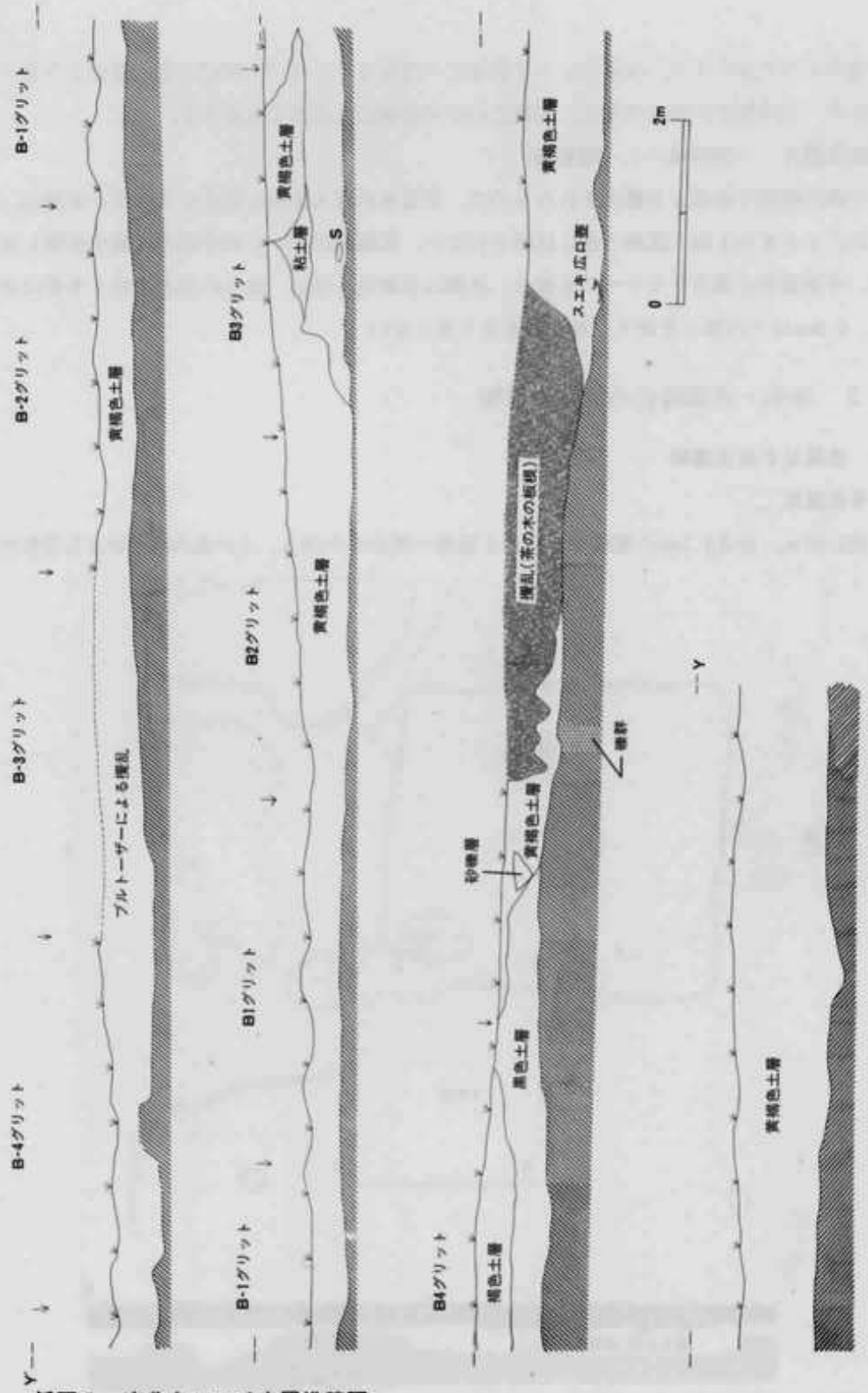
Ⅳ　遺構と出土遺物

１　縄文時代遺物

発掘調査の結果，縄文時代に属すと思われる遺構は確認できなかったが，調査区南部の４号



挿図4　東西トレンチ土層堆積図



挿図5　南北トレンチ土層堆積図

溝状遺構より土器片１点，南北トレンチ北部より凹石１点，柿の木塚盛土表土層中より若干の打製石斧，石鏃数点が検出された。石器については後にまとめて記述する。

縄文土器片　（挿図18－１　図版10）

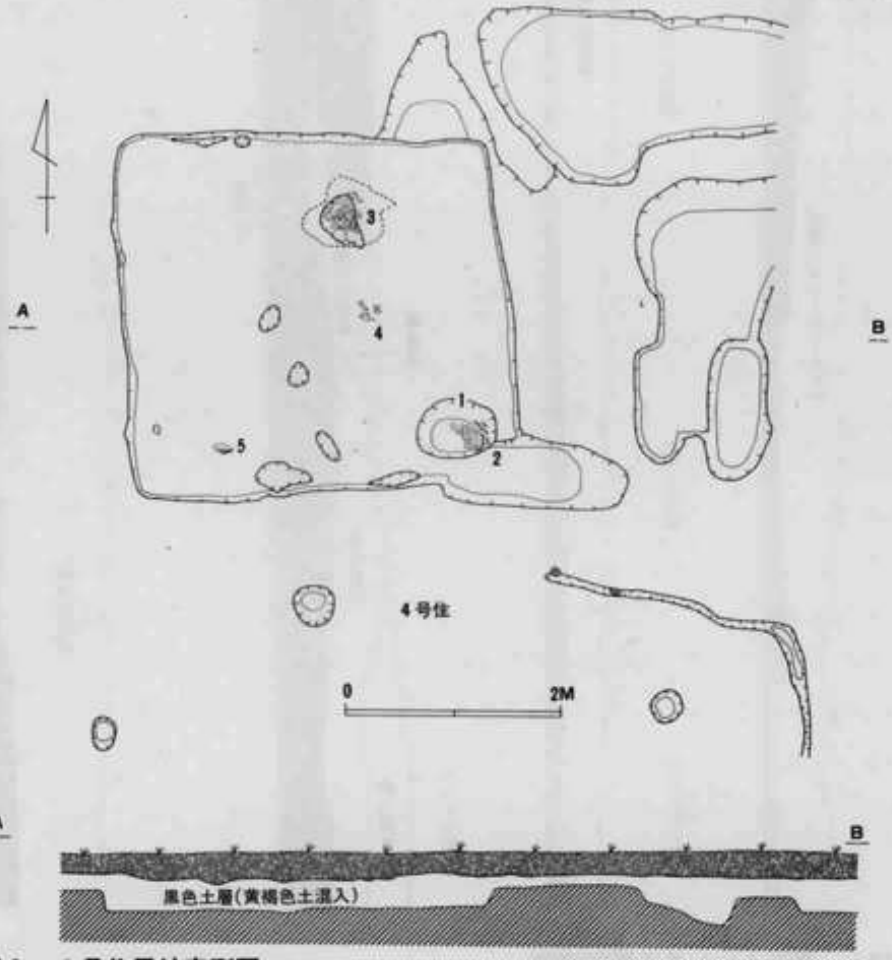
４号溝状遺構の南端より検出されたもので，黒褐色の流入土中に混在していた。文様は，棒状工具による２本１組の沈線で横に区画を行ない，区画内に「ハ」の字状の沈線を充填したもので，中期後半に通有なモチーフを持つ。色調は赤褐色を呈し，胎土に長石の粒を多量に含有する。0.6cmほどの厚みを測り，焼きはあまり良くない。

２　弥生・古墳時代の遺構と遺物

(1)　住居址と出土遺物

１号住居址

東西3.65ｍ，南北3.3ｍの規模で，北西と南西の隅がやや開き，その他の隅が狭まる菱形を帯



挿図６　１号住居址実測図

びた正方形のプランを持つ。黄褐色の地山を約20cm掘り下げて構築しており，セクション図で見るように黒色土の復土のため，プランは明瞭であった。

確実に柱穴と思われるものは，精査の結果においても明らかにすることはできず，平面図で見るように，深さ11.5cmから2cmの不規則なピットが検出されたのみであった。炉址は，住居址北よりに検出された。破線で示した部分に炭が見られ，挿図7－3の甕が細かく割れて重なった状態で検出され，土器片の下には，最大深さ7.5cmを測るピットがあった。また，住居址の南東コーナーには，東西75cm，南北55cm，深さ約25cmの土拡が検出され，挿図7－1と挿図7－2の2個体分の甕が，土拡東壁にそって出土した。位置よりして貯蔵穴と思われる。また，床面からは，挿図7に示す小形壺形土器，高坏坏部も検出されている。

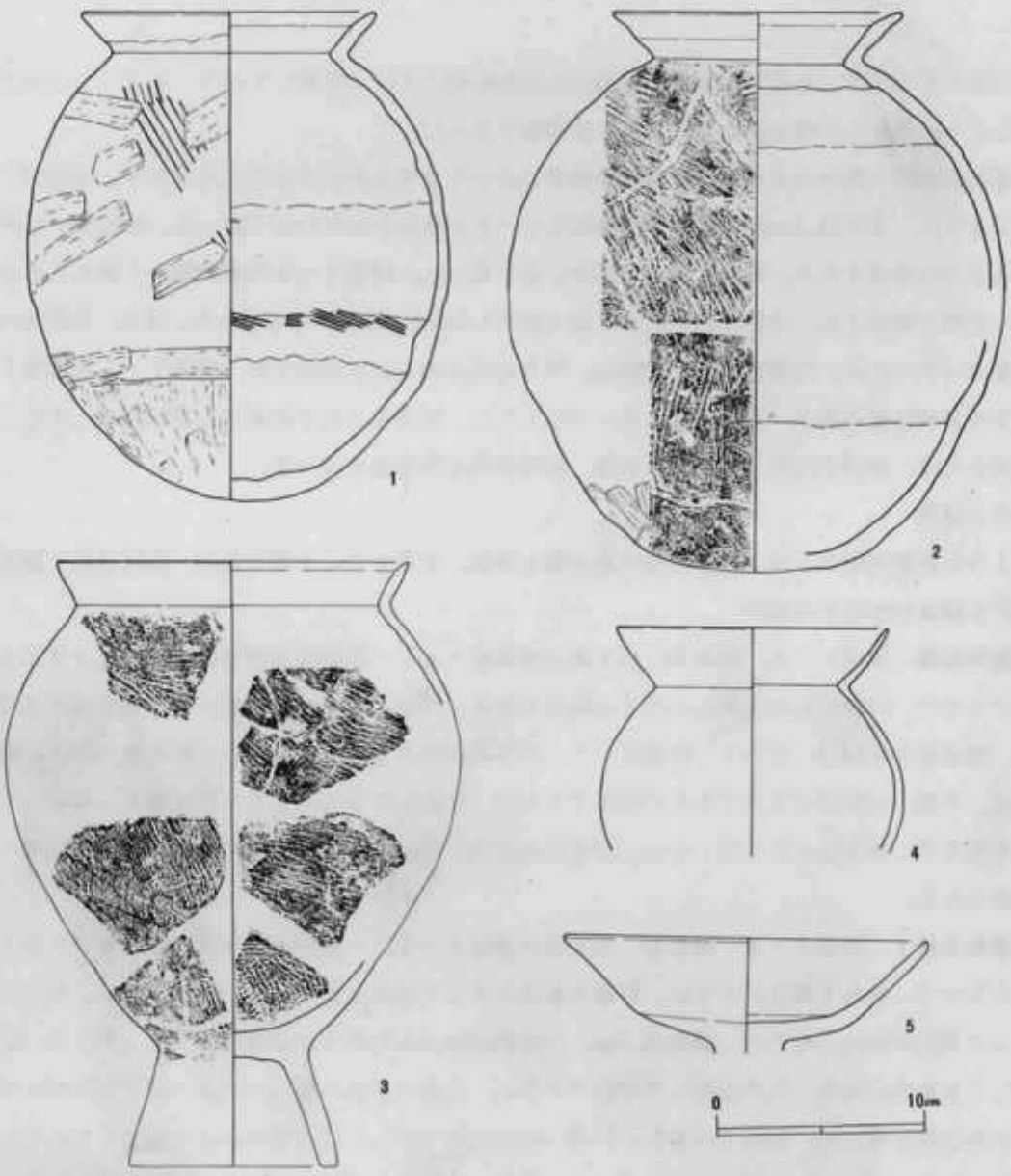
出土遺物

1号住居址床面からは，器形の知れる土器1個体，底部を欠く土器3個体，高坏坏部1個体の計5個体が検出された。

壺形土器（挿図7－4　図版10　出土地点挿図6－4）　住居址ほぼ中央の床直上より出土したもので，口縁から胴上部にかけての破片である。挿図7－4で見るように，推定口縁径13cm，胴部最大径14.5c を測り，口縁は「く」の字状に折れて，やや内反しながら外へ開く。胴部は，下部から底部が欠失するため不明であるが，球形をなすものと思われ，胎土，器面ともに赤褐色で，焼きはあまり良くない。器高15cm前後と思われる小形の壺で，器厚も非常に薄い土器である。

甕形土器1（挿図7－1　図版10　出土地点挿図6－1）　住居址南東隅の貯蔵穴より出土したもので，甕形土器2とともに，貯蔵穴東壁にそって流れ込んだ状態で検出された。復元によって器形が知れたもので，器高23.5cm，口縁部径14.2cmを測り，口縁部は「く」の字状に屈曲して直線的に開き，丸味を持った卵形の胴部に，丸底の底部を持つ。頸部と胴下部内面に明瞭な接合面が見られ，頸部では胴から口縁へ粘土を指で押し上げ，そのあとに横ナデ整形をしている。胴下部には，内面に幅2cm前後の接合面が隆起してめぐり，口縁，胴上部，底部と3つを接合して製作されたことがわかる。内面は丁寧に整形されるが，外面は刷毛目の後，ヘラケズリがされたようであり，胴肩部から胴腹部にかけ，所々に刷毛目が見られる。胴下部には二次的な加熱による荒れが認められ，赤褐色を呈し，また，煤の付着も見られる。胎土良く，焼成も良好である。

甕形土器2（挿図7－2　図版10　出土地点挿図6－2）　甕形土器1とともに検出されたものである。焼成不良で磨滅が著しく，胴上部と，胴下部から底部が復元されたのみで，全体の器形を直接知ることができなかった。口縁部径14cmを測り，「く」の字状に折れて外反する口縁は，不明瞭な段を有し，口唇近くで薄くなり外反する。胴部は肩が張らずに卵形を呈し，粗



挿図7　1号住居址出土土器

い刷毛目が左上から右下の方向に無造作に施されている。丸底の底部はヘラケズリがされ，やはり加熱による荒れが認められる。色調は明褐色をなし，胴部なかほどには煤が付着し，黒褐色を呈す。土器内面には，頸部，胴下部の2か所に接合面が明瞭にみられ，共にその部分が肥厚する。

台付甕形土器（挿図7－3　図版10　出土地点挿図6－3）　炉址より検出された土器であるが，磨滅が著しく全体の器形を知ることができなかった。挿図7－3の推定復元図で示す土器で，口縁は「く」の字状に外反して肥厚し，口縁端部内面は面取りしたようになっている。

胴部は器厚0.6cmを測り，内外面ともに刷毛目が施されている。また，胴下部にはヘラケズリが行われている。

高坏坏部（挿図７－５　図版10　出土地点挿図６－５）　住居址床面より出土したもので，脚部を欠く。坏部底と立ち上がりの接点には，明瞭な段は認められないが，脚部から横に外反する口縁は，１度屈曲してから上方へと延びる。焼成は悪く，表面は荒れているが，内外面ともに，左上より右下方向へ口唇から内部へ向けた研磨が見られる。口縁部径17.6cmを測る。

２号住居址

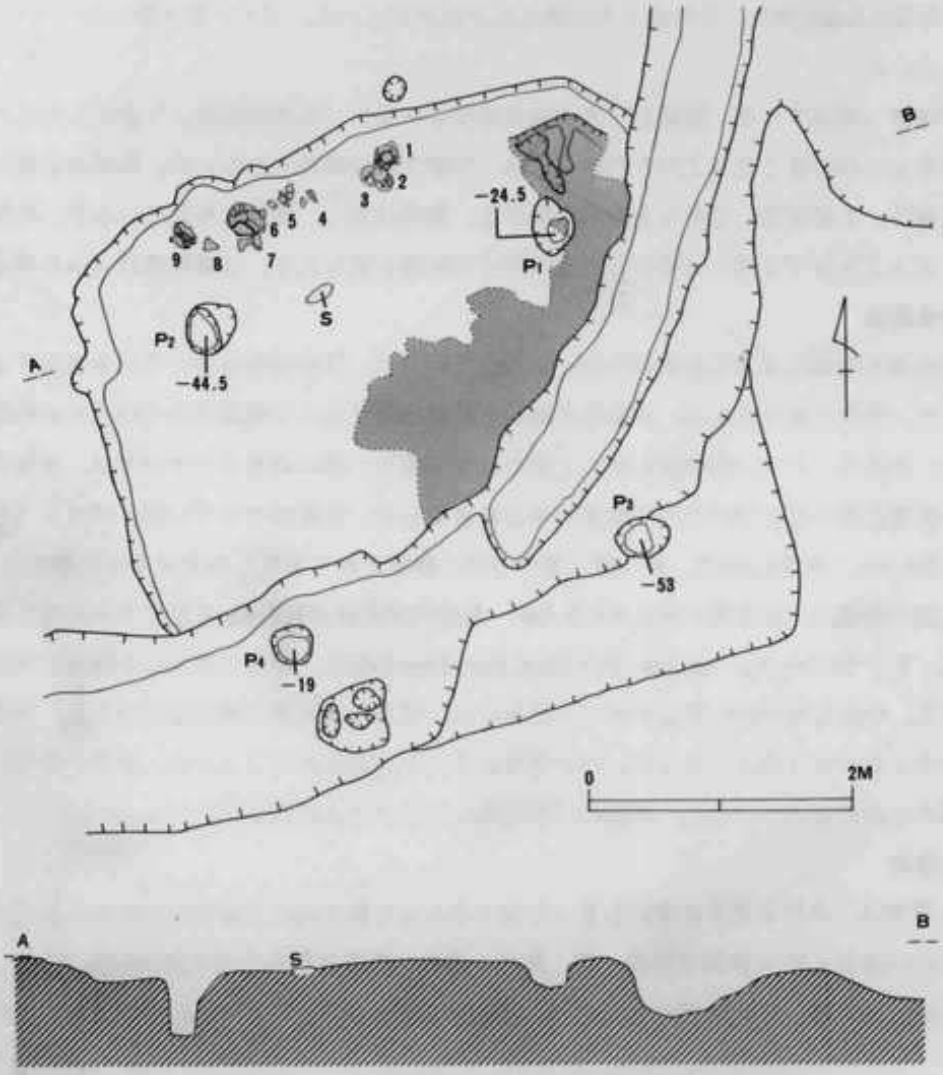
後世の溝状遺構によって南東側半分が切られていたが，ほぼ住居址のプランを推定することができた。北壁の掘り込みは，黄褐色の地山を約15cm掘り込んで構築されていたため明瞭であったが，北東コーナー，西壁面の立ち上がりは不明瞭で，特に北東コーナーでは，灰褐色の粘土質な土壌を掘り込んでいたので壁面の検出に苦労した。住居址のプランは，隅丸正方形を呈し，東西4.9m，南北4.8mで，N－16°－Eの方向に構築されており，柱穴は４か所検出された。各柱穴間の距離は，南北間がそれぞれ2.5m，東西間がそれぞれ2.8mとかなり企画性に富んだもので，P_1－24.5cm,P_2－44.5cm，P_3－53cm，P_4－19cmを測る。炉址と思われる場所は検出されず，また，住居址中央から東にかけての床面には，厚さ１cm程度の硬化面がみられ，発掘中にガチガチと音がするほどであった。P_1の底部にもこれが見られることから，長年の使用により踏み固められたものではなく，意識的に床を貼ったものと思われる。

出土遺跡

出土遺物は，黒色を呈す非常にしまった復土中からも断片的に土器の出土が知られたが，北壁付近の床面より，挿図９の壺，甕，高坏，器台，鉢形土器の合計９個体が出土した。いずれも床面に密着した状態での検出で，住居址廃絶期のものとみてもさしつかえないと思われる。

壺形土器１（挿図９－１　図版11　出土地点挿図８－６）　器高27.2cm，胴部最大径24.5cmを測る壺形土器で，口縁部は「く」の字状に折れてゆるく外反しながら開き，胴下部に最大径をもつ下ぶくれの無花果形の胴部をなす。口縁端部から底部にかけての外面全体には，細かな刷毛目が施されており，口縁部では縦方向，胴部では左上から右下へと施されている。口縁端部をのぞいて焼成はよく，灰褐色・黄褐色・黒色の色調をなす。胎土は若干の砂粒を含むが良好で，内面はていねいになめらかに整形され，黒色をなす。全体に煤が付着している。

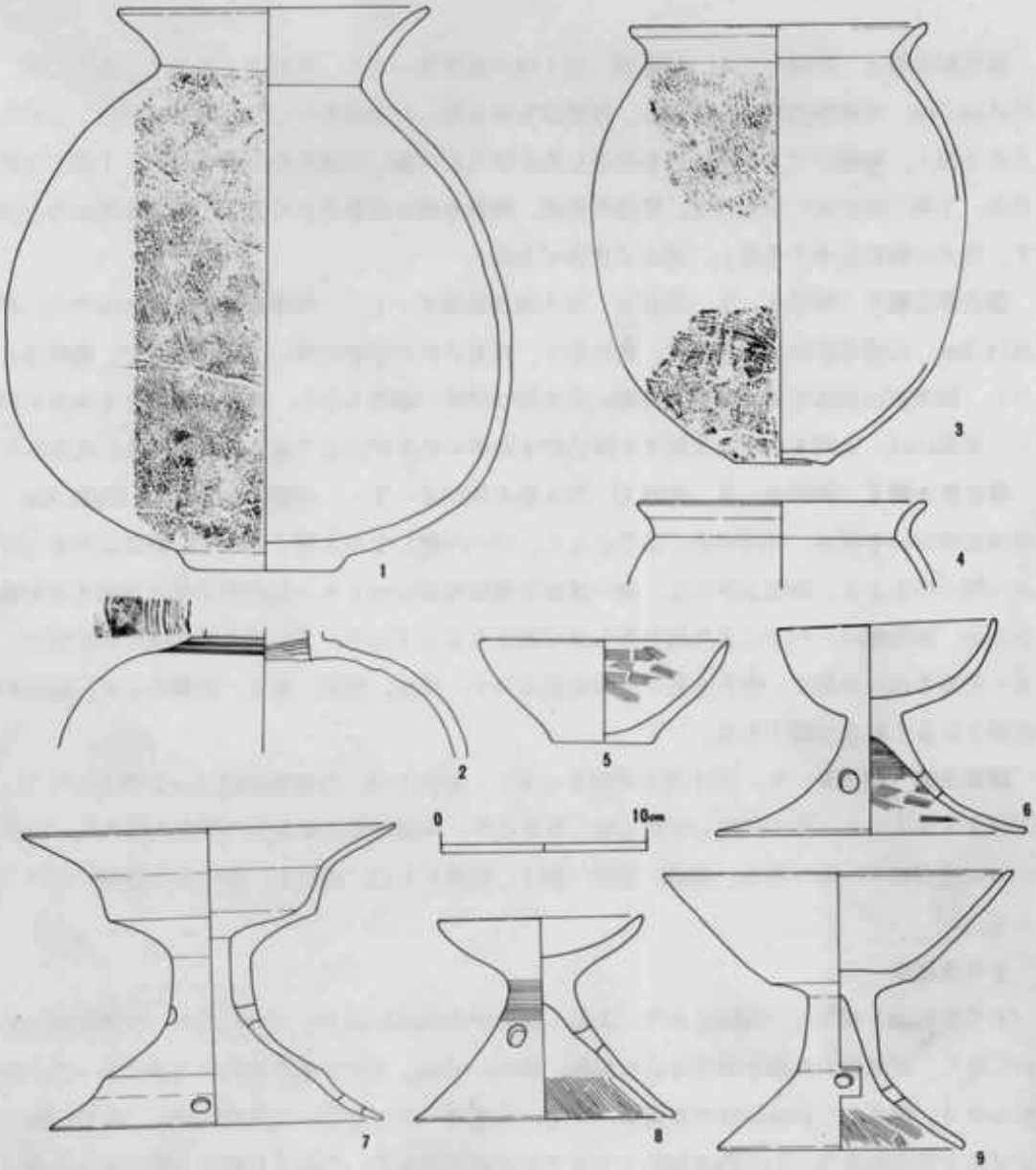
壺形土器２（挿図９－２　図版11　出土地点挿図８－５）　住居址床面より出土したもので，上胴部破片のみであった。頸部に肥厚させた段を持ち，その下に数条の沈線をめぐらす。胴部は不明であるが，おそらく球形の胴部をもつ壺形土器と思われ，赤褐色の色調をなし，丹塗されていたようである。



挿図8　2号住居址実測図　（平面図　斜線は床面硬化面）

甕形土器1（挿図9－3　図版11　出土地点挿図8－9）　住居址床面より出土したが，口縁部から上胴部と，底部が復元されたのみであった。口縁部径14.5cmを測るやや小型の甕で，口縁部はゆるやかに「く」の字状に外反し，口唇はやや肥厚して立ち上がる。胴部は復元されず不明であるが，口縁部から上胴部にかけてはあまり肩が張らず，上底気味の底部へと続くものと思われる。器厚は薄く，外面全体に刷毛目が施され，胎土，焼成ともに良好である。外面灰褐色，内面灰黒色を呈し，外面全体には煤の付着がみられる。

甕形土器2（挿図9－9　図版11　出土地点挿図8－4）　口縁部破片のみで，床面より出土した。肩はあまり張らず，ゆるやかに「く」の字状に外反する口縁を持ち，口縁端部は丸味を持つ。器面内外面ともに刷毛目はみられず，ナデにより整形されており，やや黒味を帯びた



挿図9　2号住居址出土土器

ものである。推定口縁径14cmを測る。

高坏形土器1（挿図9－9　図版12　出土地点挿図8－7）　床面上より出土したもので器高13.4cm，口縁部径17.1cmを測る。口縁はやや内彎しながら大きく開き，坏底部と口縁は陵を持って接する。脚部は4か所に円形の孔を穿ち，透し孔のところから屈曲して直線的に大きく開く。脚部端部は，ヘラにより削り取って面取りされており，内面は刷毛目で整形される。坏部外面，内面，脚部外面は，丁寧に研磨されており，黒褐色の色調をなす焼成の良い土器である。

高坏形土器2（挿図9－6　図版12　出土地点挿図8－3）　床面上より出土したもので，器高10.2cm，口縁部径10.8cmを測る。坏部は丸味を持った半球形をなし，脚部は外反しながら大きく開く。脚部には3か所に円形の透し孔が穿たれ内面には整形時の刷毛目が，上部では横方向，下部では斜位に見られる。坏部内外面，脚部外面は研磨されており，色調は黄褐色を呈す。胎土に砂粒を多く含有し，焼成は普通である。

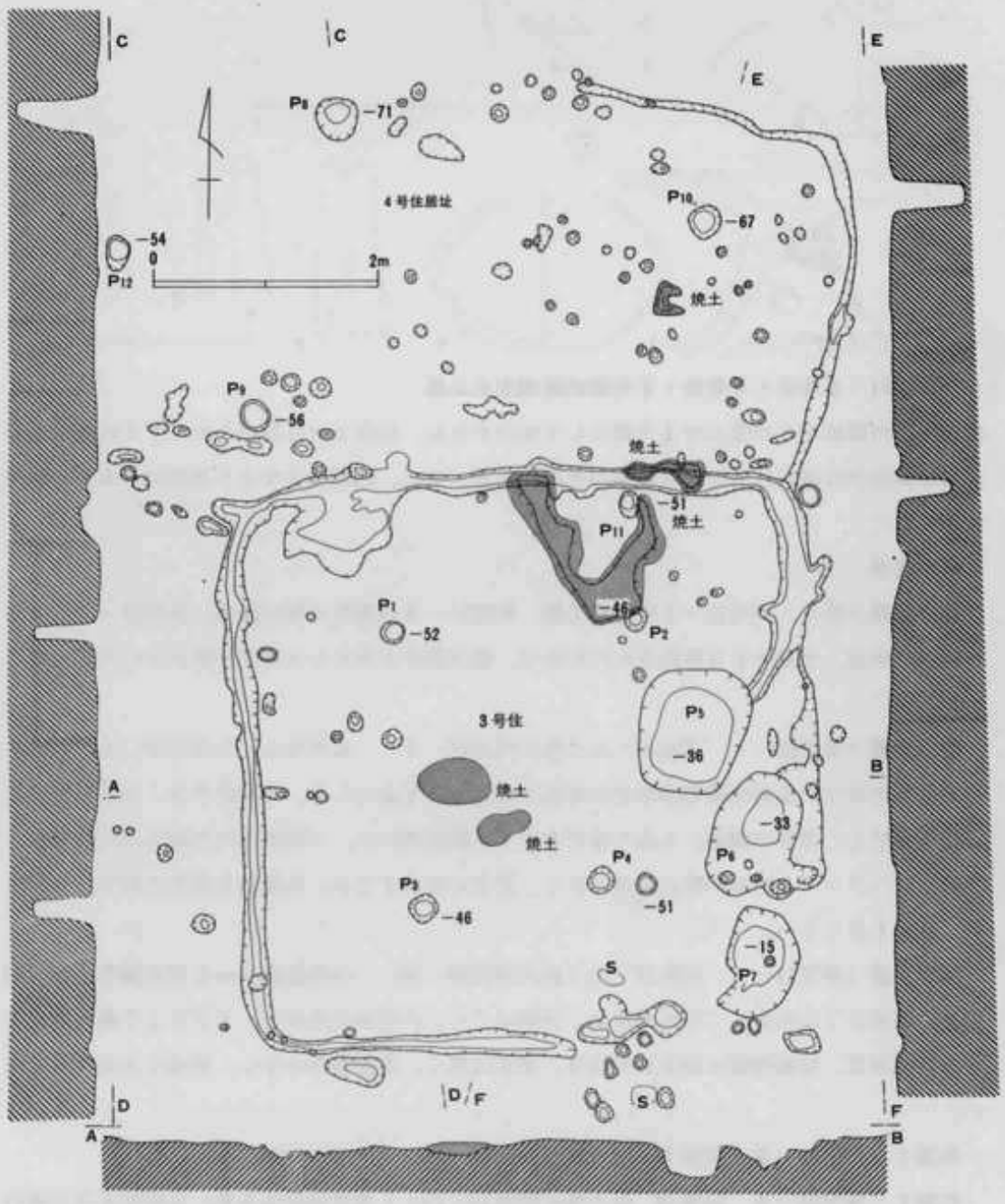
器台形土器1（挿図9－7　図版12　出土地点挿図8－1）　床面より出土したもので，器高14.3cm，口縁部径18.3cmを測る。胎土良く，精選された非常に薄い土器であるが，焼成はもろく，器表面は剝落する。坏部，脚部に段を持つ鼓形の器形をなし，口縁，脚部とも大きく開く。脚部には，上段3か所，下段3か所の計6か所の孔が穿たれており，坏部中央に孔がある。

器台形土器2（挿図9－8　図版12　出土地点挿図8－2）　床面より出土し，器高9.8cm，口縁部径10cmを測る。坏部中央には孔がなく，やや内彎しながら開くもので，脚部は外反しながら開く形をとる。脚部上半には，細い繊細な櫛描沈線がめぐり，同内面下部には刷毛目が施される。脚端部は，ヘラにより削り取られて面取りされており，3か所の円形透し孔を持つ。よく研磨された土器で，焼きも良く，黒褐色を呈す。焼成，整形，胎土，色調ともに，高坏形土器1とよく似る土器である。

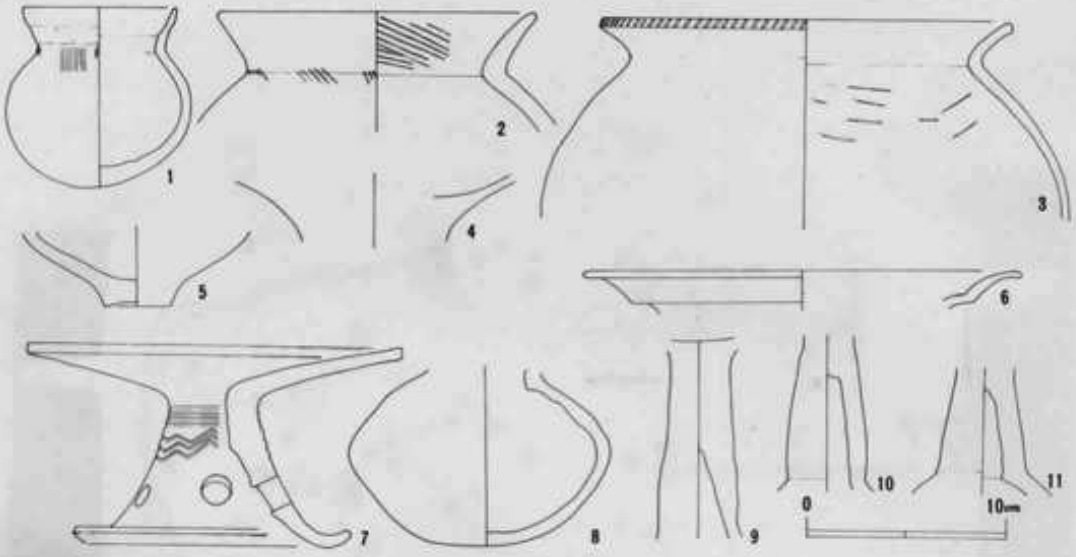
鉢形土器（挿図9－5　出土地点挿図8－8）　器高5cm，口縁部径12.1cmを測るもので，床面より出土した。やや内彎しながら開く形をとり，器面外面は縦方向の研磨が施され，内面には刷毛目痕が一部で残る。焼成，整形，胎土，色調ともに，高坏1，器台2と同類のものである。

3号住居址

4号住居址と切り合い関係にあり，また，地表下約35cmに遺存していたため，保存状態は極めて悪く，黄褐色の地山を掘り込んだ周溝，柱穴，炉址，土拡が検出されたのみであった。幅20cm前後，深さ5～10cm程度の周溝は，東辺，南東コーナーを除いて東西5.15m，南北5.2mでほぼ正方形にめぐり，P_1～P_7を初めとする土拡が検出された。このうち柱穴と思われるものはP_1～P_4の4か所で，P_1－52cm，P_2－46cm，P_3－46cm，P_4－51cmを測り，正方形に並んでいた。炉址は，床面中央西よりで検出された。焼土の分布が2か所見られ，大きな方は東西65cm，南北40cmの範囲に厚さ10cm程度焼土が堆積し，その下に表面が固く焼けしまった浅い皿状の土壙が見られた。この他，焼土は周溝北辺付近にも検出されたが，本住居址周溝にかぶる状態で堆積しており，また，後述する4号住居址の柱穴P_{11}にもかぶっていたことから，住居址とは直接関連しない後世の焼土かと思われる。柱穴外のピットは無数検出されたが，そのうちP_5～P_7は，住居址東辺に並んで検出されたもので，P_5－36cm，P_6－33cm，P_7－15cmを測る楕円形のものであった。P_7は，住居址南東コーナーで周溝がとぎれた所に存在するもので，挿図11－2の



挿図10　3号住・4号住居址実測図



挿図11　3号住・4号住・3号溝状遺構出土土器

甕形土器口縁部がその復土中より倒立して検出された。耕作土から浅いため，すでに胴部から底部は耕作中に消失してしまったものと思われる。また，P_5の復土中より挿図21－5の石鏃が検出された。

出土遺物

遺存状態が悪く，挿図11－1の壺形土器，挿図11－2の甕形土器口縁部，挿図21－3，5の石鏃が，床面，土拡中より検出されたのみで，他は耕作土中から土器片が検出されたのみであった。

壺形土器（挿図11－1　図版13　出土地点挿図16－9）　器高9cm，口縁部径7.7cmを測る小形の壺形土器で，住居址南周溝付近の床面上約8cmより出土した。口縁はゆるく外反して二重口縁風を呈し，球形の胴部，丸底の器形をなす。胴肩部には，一部縦方向の刷毛目が施され，底部にはヘラケズリ痕が明瞭に認められる。胎土に砂粒を含み，黒褐色を呈す土器で，整形は雑で焼きも良くない。

甕形土器（挿図11－2　図版13　出土地点挿図16－10）　口縁部径16cmを測る甕形土器口縁部で，胴部以下は欠失して不明である。口縁は「く」の字状に外反し，ナデにより整形されるが，外面頸部，口縁内面に刷毛目が残る。器厚は厚く，薄黄茶色をなし，焼成もあまり良くない。

石鏃1（挿図21－5　図版18　出土地点挿図16－11）　チャート製。

石鏃2（挿図21－3　図版18　出土地点挿図16－12）　黒雲母安山石製。住居址北辺周溝内より出土。

4号住居址

1号住居址，3号住居址と切り合い関係にあり，やはり，周溝，柱穴が検出されたのみであった。周溝は，幅15cm前後，深さ5cm程度のもので，東辺，北辺が比較的よく遺存したが，その他は検出することができなかった。柱穴と思われるものは，P_8～P_{12}の計5か所で，それぞれP_8－71cm，P_9－56cm，P_{10}－67cm，P_{11}－51cm，P_{12}－54cmを測る。このうち，P_8～P_{11}は東西約3.45m，南北約2.7mの間隔にほぼ矩形に並んで検出された。住居址に伴う炉址は発見されず，床面中央東よりの焼土は，3号住居址周溝北辺でみられたものと同様，後世のものであった。

出土遺物

住居址の掘り込みが浅く，耕作土中より断片的な土器片の出土が知られたのみで，良好な資料を検出することができなかった。住居址床面から，挿図11－3の台付甕形土器，挿図21－1，4の石鏃2点，柱穴P_9より，挿図20－7の石庖丁片1点が検出された。

台付甕形土器（挿図11－3，4　図版13　出土地点挿図16－1）　口縁部径20.8cmを測る台付甕形土器で，住居址床面上より出土した。口縁部破片と底部が検出されたのみであったが，台付の甕形の器形をなすものと推定され，丸味のある胴上部から口縁は「く」の字状に強く外反し，口唇部にはヘラ状工具による刻み目が施されている。胎土に小石を多く含有し，焼成も悪いため，整形手法等は不明瞭であるが，内面にはヨコナデによる小石の移動痕が見られる。薄黄茶色の色調を呈し，表面には無数のヒビが入っている。

石庖丁（挿図20－7　図版18　出土地点挿図16－13）　柱穴P_9の復土上部より検出されたもので，存在部長4.8cmを測る。粘板岩製で，一部に斜方向の擦痕がみられる。

石鏃（挿図21－1，4　図版18　出土地点挿図16－14・15）　出土地点14のものはチャート製，15のものは黒雲母安山岩製である。

1号住，3号住，4号住の切り合いについて

さて，1号，3号，4号の各住居址の切り合い関係であるが，1号住居址の復土は単一の黒色土層であり，4号住居址の床が1号住居址の復土中に存在しなかったことから，1号住居址の方が後出するものと考えられる。また，3号住居址，4号住居址との切り合いは，床面レベルが同一で，掘り込み面もすでに耕作土となっていたため不明な点が多く，挿図10の断面EFで両住居址の床面を掘り割ったが，張り床等の痕跡は検出されなかった。ただ，出土遺物を考える場合，4号住居址からは石庖丁が出土しており，小形壺形土器を検出した3号住居址より4号住居址の方が先行するものと思われる。

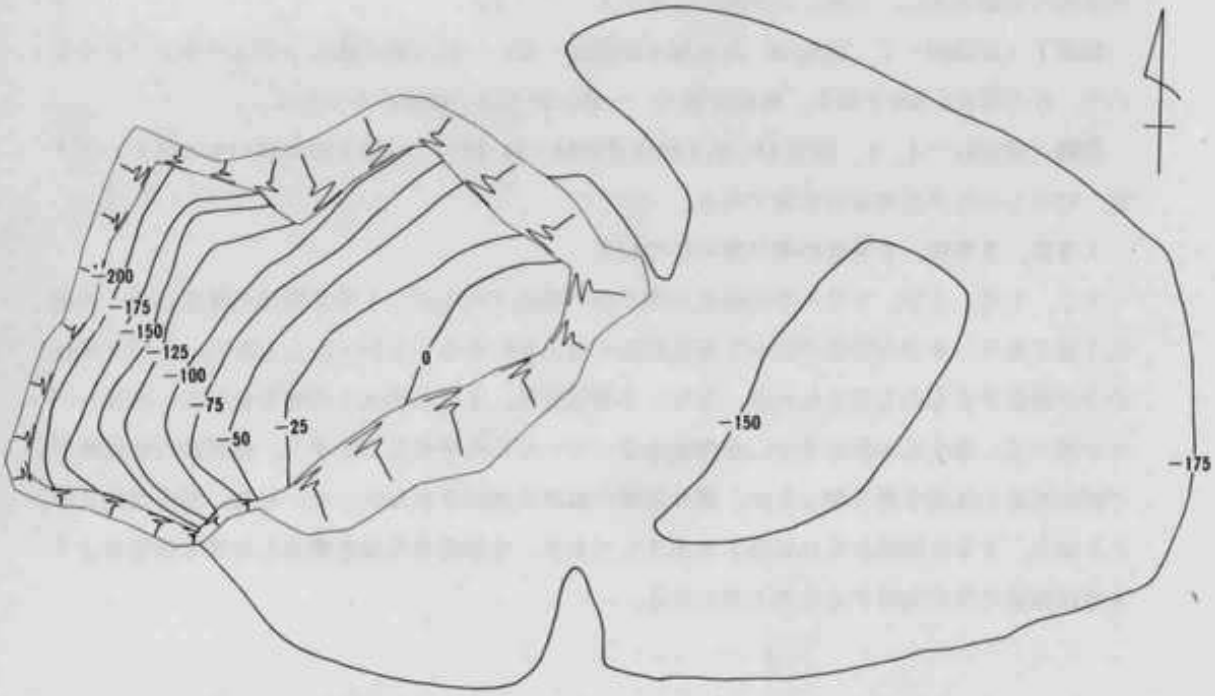
(2) 柿の木塚古墳

雇用促進住宅建設用地，中央西よりに存在し，調査前は東西約11m，南北約8m，高さ約2mの笹や雑木におおわれた小山であった。発掘に伴う事前調査で，その土中より刷毛目の施された土器片が出土し，墳丘の一部と断定されたが，その後の地形測量及びボーリング探査の結果，すでに主体部は削平され，本来の墳丘の約10分の1程度が残されているにすぎないことが判明した。

墳丘

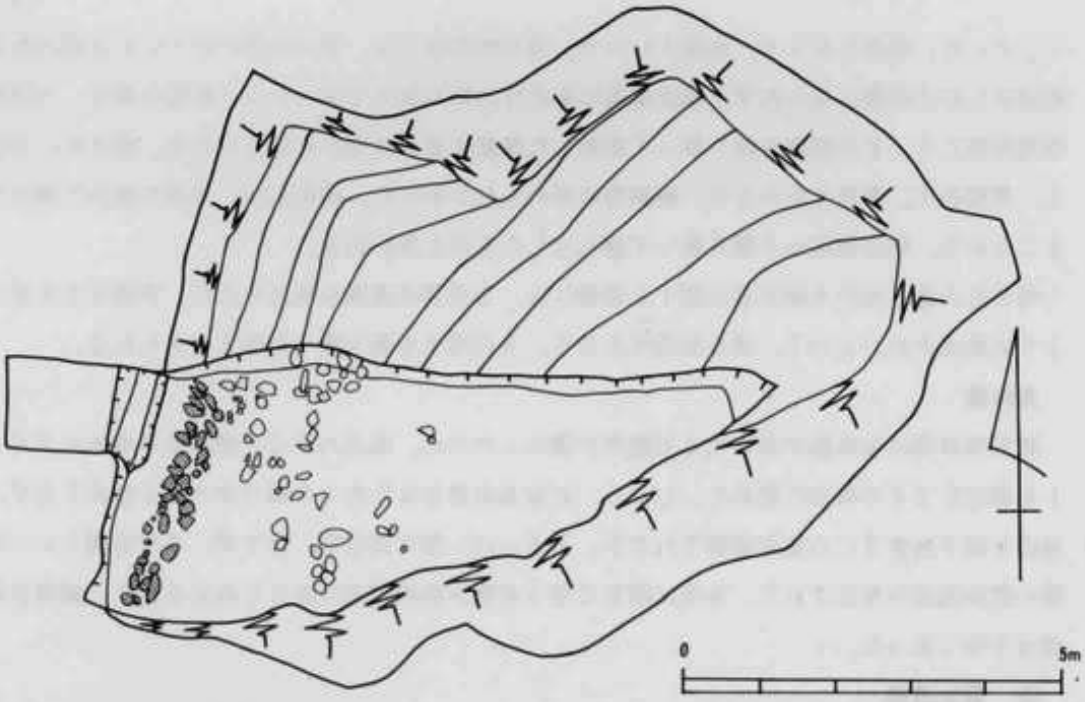
立木伐採の後，25cmコンタで墳丘の地形測量を行った。挿図12で見るように西側は比較的良く墳丘の原形が保たれていたが，東側では約1.7mの崖となっており，保存状態はきわめて悪かった。測量の結果，残存部墳丘は，本来の柿の木塚古墳墳丘の北西縁の一部と思われ，またボーリング探査でも主体部が検出されず，すでに主体部は削平され耕地となっていることがわかった。

当初，主体部検出とともに，残存部墳丘表土全面を除去する予定であったが，主体部検出用のグリットから住居址が検出されたため，3グリットを西へ延長しその区域のみを除去することにした。表土層は，農作業中の石捨て場となっていたのか，小石が多量に堆積し，墳丘西側

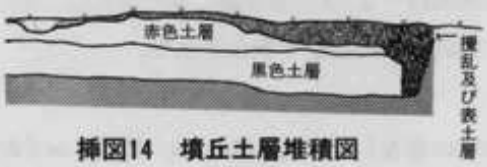


挿図12　柿の木塚古墳墳丘地形測量図

0　5M



挿図13　葺き石実測図



挿図14　墳丘土層堆積図

裾部では約50cmの厚さに堆積していた。表土層を除去すると葺き石が検出された。葺き石は比較的よく遺存し，墳丘裾部では人頭大の石をほぼ2列にめぐらし葺き石の裾部として，墳丘の斜面にも挿図13のように一部葺き石と思われる石が検出された。

墳丘の断面は，3グリット列北壁で観察した。挿図14の状態を示し，地山はほぼ水平となっており，その上に古墳造営時の基底部となる非常にしまりある黒色土層が堆積していた。この層は土器片を多量に包含し，1号住居址，2号住居址の復土となるもので，自然の堆積状態を

示していた。東西トレンチ，南北トレンチ，墳丘断面図では，墳丘の築かれていたと思われる範囲にしかこの層は見られず，墳丘築造にあたり当時の表土であったこの黒色土層を，古墳築造地を残して，その周辺を削り取って整形した後盛土をしたものと考えられる。盛土は，赤色土，黒褐色土，黄色土からなり，板築等は認められなかった。赤色土が，周辺の地山と類似することから，周辺地区から掘り取って盛土としたものと思われる。

葺き石の他，柿の木塚古墳に関する遺構には，2号溝状遺構が検出された。本墳をとりまくように検出されたもので，墳丘築造にあたり，その用土を掘り取った痕と考えられる。

主体部

墳丘残存部に主体部が存在する可能性が薄かったため，墳丘の中心と思われる場所にグリットを設定してその検出に努めた。しかし，石室基底部をはじめその掘り方さえも検出されず，地山を掘り込まずに石室が構築されたか，あるいは，竪穴式石室，粘土槨　木棺直葬といった類の埋葬施設が推定された。本墳に確実に伴う遺物が発掘調査に於ても検出されず，結局主体部は不明であった。

(3)　溝状遺構

発掘調査により4か所から溝状の遺構が検出された。このうち2号溝状遺構，3号溝状遺構からは須恵器，弥生式土器が検出され，いずれも中世以前の溝と思われる。

2号溝状遺構

東西トレンチ，北トレンチ及び調査区南東グリットで検出された溝である。部分的な検出に終わったため，全体像を明らかにすることが出来なかったが，挿図3で見るように柿の木塚古墳をとりまく溝のようにも考えられる。東トレンチでは，挿図4の土層図で示すように幅約9mを測り，浅い皿状の断面をなしている。深さは最深部で地表より約1m，地山より70cm掘り込んでおり，底には黒色土の堆積がみられた。

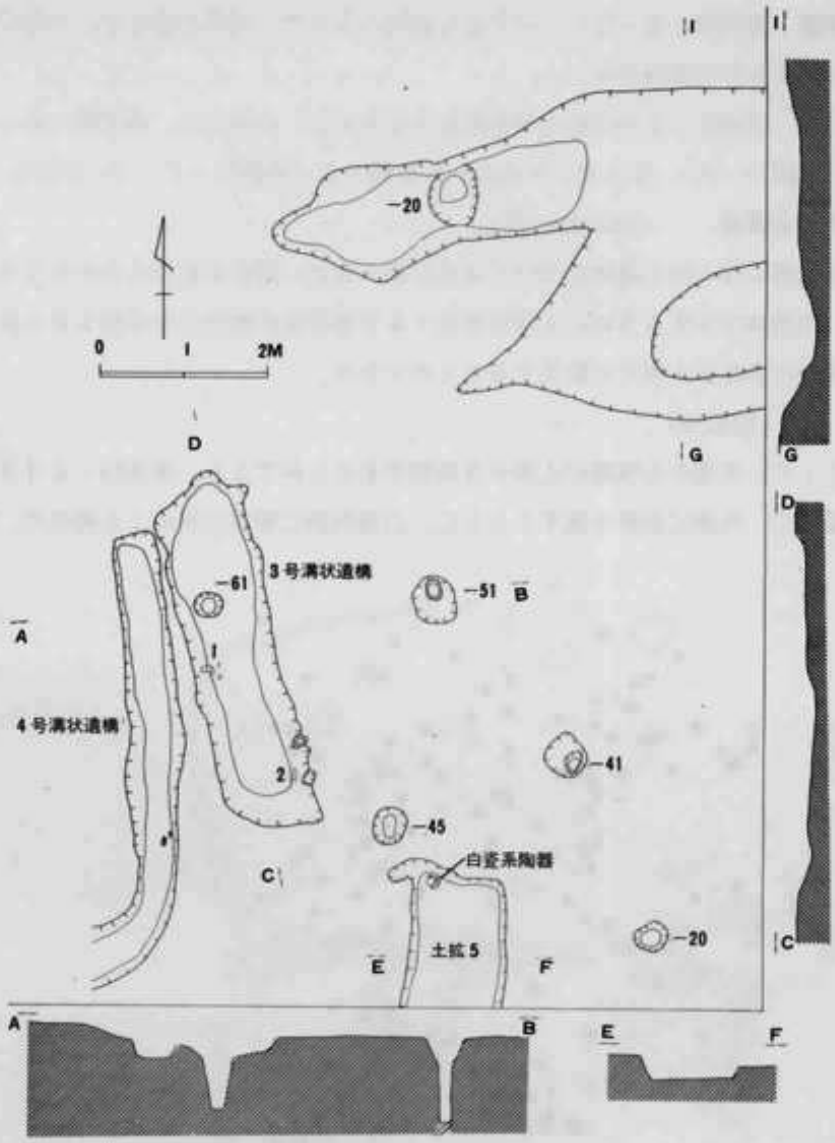
出土遺物は，－B－2グリット溝状遺構底部より挿図19－2・3の須恵器二点が出土し，また北トレンチからは，挿図19－1の大形須恵器甕が，流れ込みの状態で検出された。

3号溝状遺構

調査区南端で検出されたもので，4号溝状遺構の東に存在した。長さ約4.3m，幅約1mを計測する細長い溝で，深さは約15cm，断面が台形をなす溝である。

出土遺物は，褐色の復土から挿図11の弥生式土器，挿図20－8の石庖丁，挿図21－2，7の石鏃二点が検出された。

長頸壺形土器（挿図11－8　図版14　出土地点挿図15－1）　胴中央に最大径を持つ算盤玉状の胴部をなし，底部は丸底で，口縁は欠損して不明であるが，おそらく細長くひらく口縁を持つ壺形土器と思われる。器面全体にわたり研磨が加えられ，丁寧な作りである。胎土良好で



挿図15　3号・4号溝状遺溝実測図

明るいうす黄茶色をなす。

高坏形土器（挿図11－6　図版14）　口縁部径22cmを測る高杯形土器口縁部と思われる。胎土良好で明るいうす茶色を呈し，山中期の高坏の特徴をよく表わしている。

器台形土器（挿図11－7　図版14）　溝状遺構復土中より検出されたもので，器高10cmを測る。受皿部は，大きく直線的に水平に開き，脚部はラッパ状に開いて先端を折り曲げ外反する。脚上部には4本の沈線をめぐらし，さらにその下に同じ工具により鋸歯文を施している。透し穴は全部で5か所みられ，器面は，ていねいな研磨がなされている。焼成，胎土とも良好で，明るいうす黄茶色をなす。

高坏形土器脚部（挿図11－9～11）　いずれも筒状のもので，裾部で陵をなして開く器形をとる。土師器に属すものと思われる。

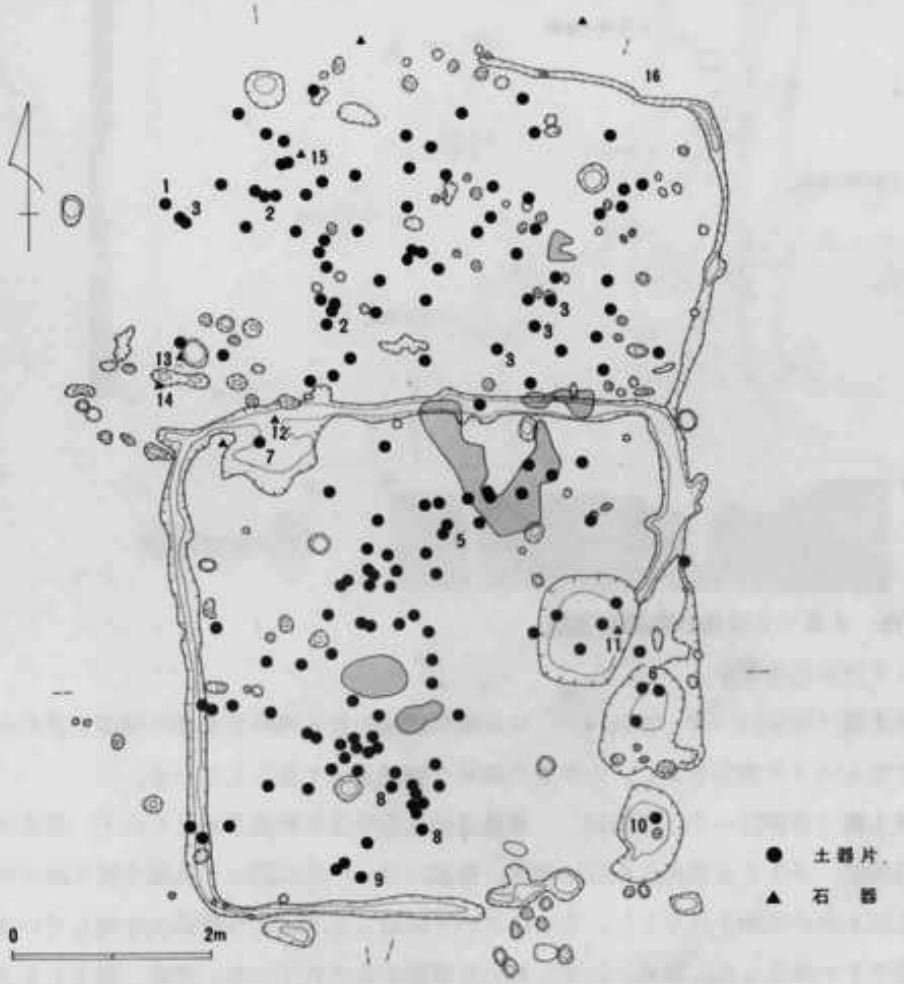
この他土器には，挿図11－5の壺形土器底部などがあるが，石器には，溝東壁にそって検出された石庖丁（挿図20－8），復土中より出土した石鏃2点（挿図21－2・7）がある。

(4)　その他の出土遺物　　（図版15～17）

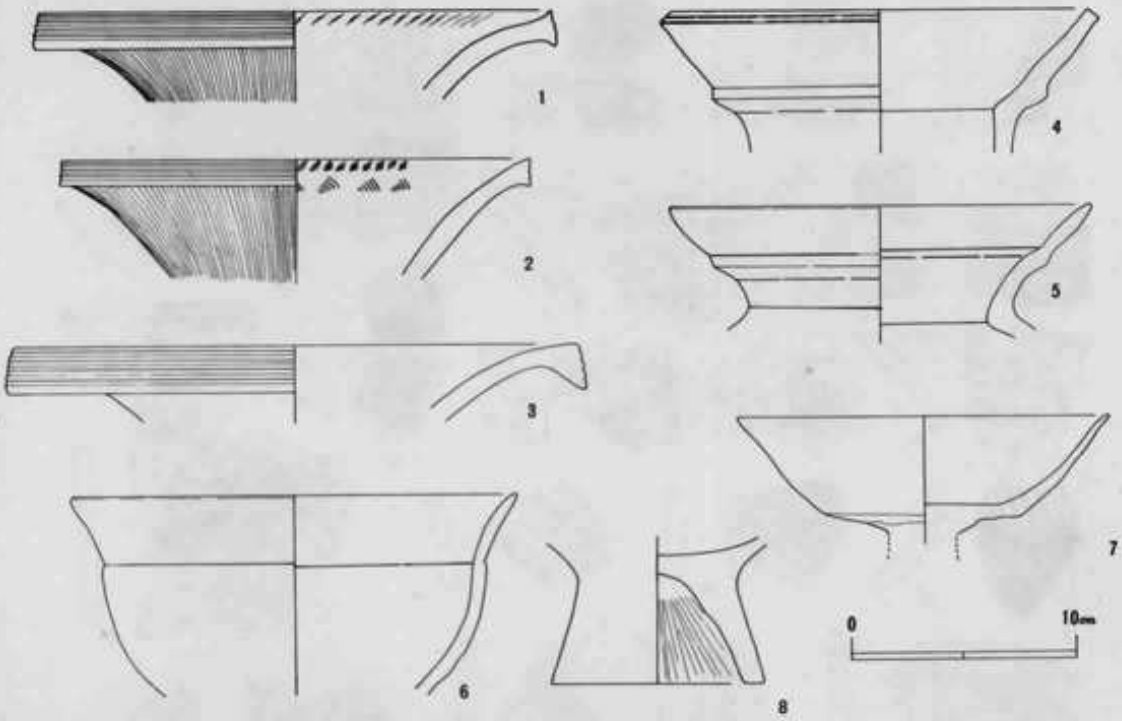
住居址・溝状遺構に伴う出土遺物については先に述べたが，耕作土中からもかなりの土器片が検出された。挿図16で示すように，3号住居址・4号住居址の耕作土中で最も多く検出されたが，調査区全域にわたり土器片を散見することができた。

弥生式土器　　（図版16）

弥生式土器として，中期から後期の土器片を識別することができた。挿図18－2～7は，いずれも口縁部破片で，外面に条痕を施すとともに，口縁内面に櫛状工具による刺突や，列点文



挿図16　3号住・4号住居址耕作土遺物分布図

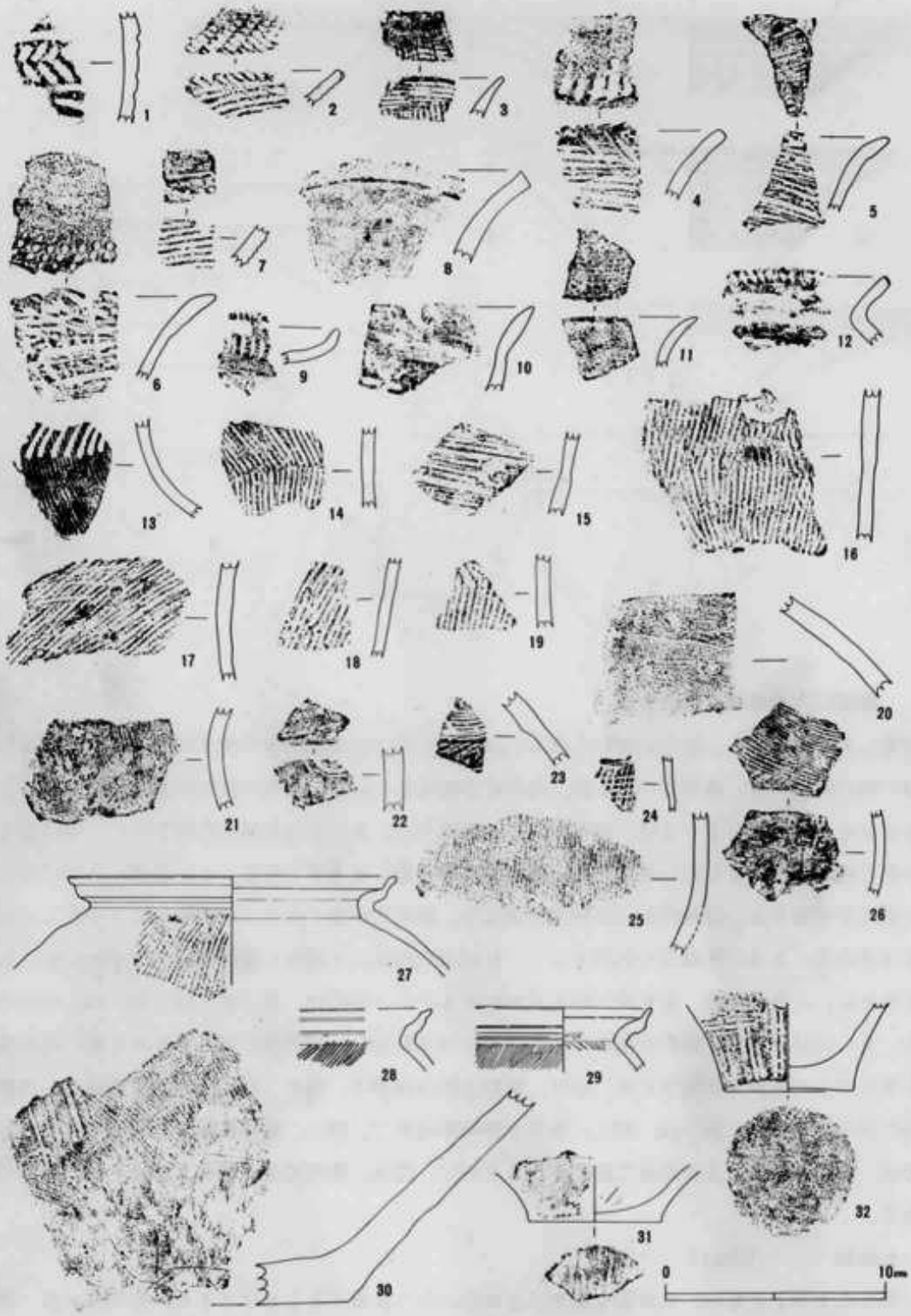


挿図17　その他の出土土器

を施したものである。胎土に砂粒を含有し，黒味を帯びた褐色を呈す焼きの良い土器で，同図14－19の胴部破片，布目痕のある31，32の底部破片とともに，中期の貝田町式土器の深鉢に比定される。挿図17－1～3は，壺形土器口縁部破片で，1，2は先端を肥厚させて，3は下方へ折り曲げて幅広くした口縁端部に，数条の沈線を施した土器である。1，2は，外面に縦位の刷毛目が施され，口縁内面には刺突列点文や，扇状文が施される。いずれも焼きが悪く，1・2は黄褐色，3は，灰褐色の色調をなし，中期末の高蔵式土器から後期初頭の山中式土器に比定される。これらの他，弥生式土器と思われるものに，挿図18－3，8～13，20～24，30がある。9，11は，壺形土器の口縁部で，9は受け口状を呈し，口唇部に刻み目がみられ，櫛描格子目文の上に爪形文が施される。12は，甕形土器口縁部で，強く「く」の字状に屈曲し，口唇部に刻み目を持つ。20～24，30は，壺形土器胴部破片で，20は，櫛描沈線で波状文を施す。22，30は，刷毛目の上に太い沈線で施文されるもので，23は，櫛描沈線，刺突文が施される土器である。

土師器　　（図版17）

弥生式土器とともに，土師器も調査区全域にわたり散見することができた。挿図18－27～29は，口縁が「S」字状に屈曲する甕形土器で，S字状口縁甕形土器B類に比定される（註1）。



挿図18　その他の出土土器

いずれも焼きが良く，29は，内面に櫛目が一部見られる。挿図17の4～8も土師器に比定される。4，5は，共に壺形土器の口縁部で，大きく外に開く口縁には，角ばった凸帯をめぐらし，4は，堅く焼き締まった埴輪質な土器である。6は，鉢形の器形をとる土器で，頸部にわずかな段を持って口縁は外反し，口縁部には，刷毛目調整痕が認められる。胎土に砂粒を含有し，黄褐色で焼成は悪い。7は，脚部の欠損する高坏で，口縁と底面の接合面には段を有する。赤褐色の色調を呈し，内外面ともにヘラナデの整形痕が見られる。8は，壺か甕の脚台で，黄褐色を呈し，厚手のものである。この他，土師器には，挿図18－25，26などがある。

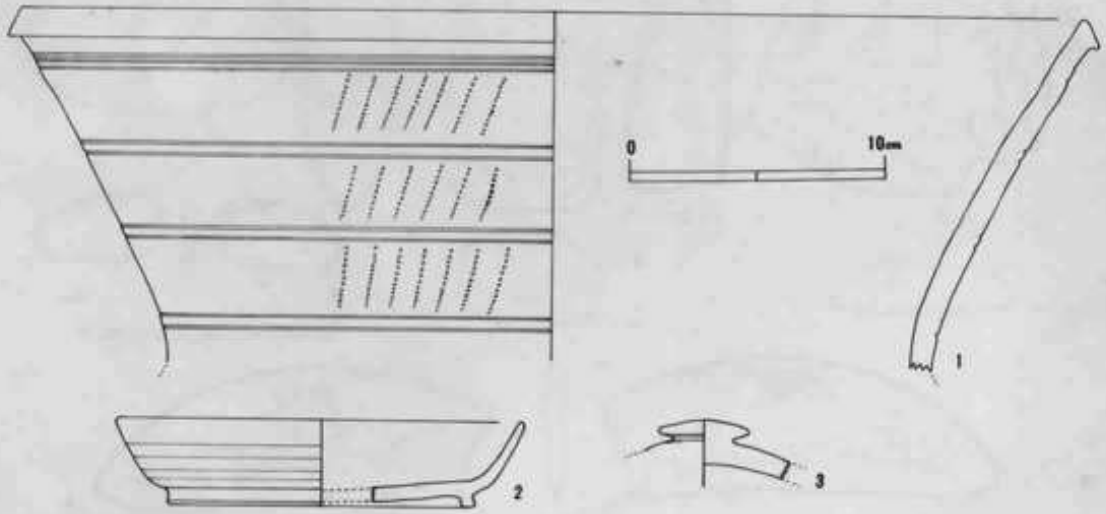
須恵器

須恵器は，南北トレンチより大型の広口壺が1点と，調査地内東南の－B－2グリットの溝状遺構内より坏の身・蓋の破片がそれぞれ1点づつ，3号住居址の地山面から甕の小破片が1点の計4点出土している。

広口壺（挿図19－1　図版17）　ほぼ一個体分の破片が出土したが，口縁部から口頸部は遺存状態がよく復原可能であるが，胴部から底部は胎土の粘りが甘かったのかハゼが入り劈開し復原不可能である。口縁部は，径43.4cmほどで，断面三角形の稜をなしている。口頸部は，高さ15.7cmほどでゆるく外反し，二・三本の沈線で三段に区切りその間を斜行櫛歯文が施されている。胴部は，全面に条線状叩具によって調整されているが，内面には叩きの痕跡は見られない。破片からみて丸底のものである。

口頸部のつくりなどから考えて6世紀中葉のものと思われる。なお，当器は，古墳築造時の祭礼と関係があるかも知れない。

坏身（挿図19－2　図版17）　口径16cm・高さ3.4cm。高台を有し，底部より外反する体部



挿図19　須恵器

で，口縁部は面取りされている。底部は中央でやや下がり，外面底部には窯印なのか直線状の沈線が付けられている。高台は短かくやや外へふんばっている。なお，体部には，ロクロ成形の際の指なで跡がみられる。

器形から考えて8世紀前葉のものと思われる。

坏蓋（挿図19－3　図版17）　宝珠状ツマミを天井部に有し，なだらかな曲面をもって口縁部にいたっていただろうと思われる。

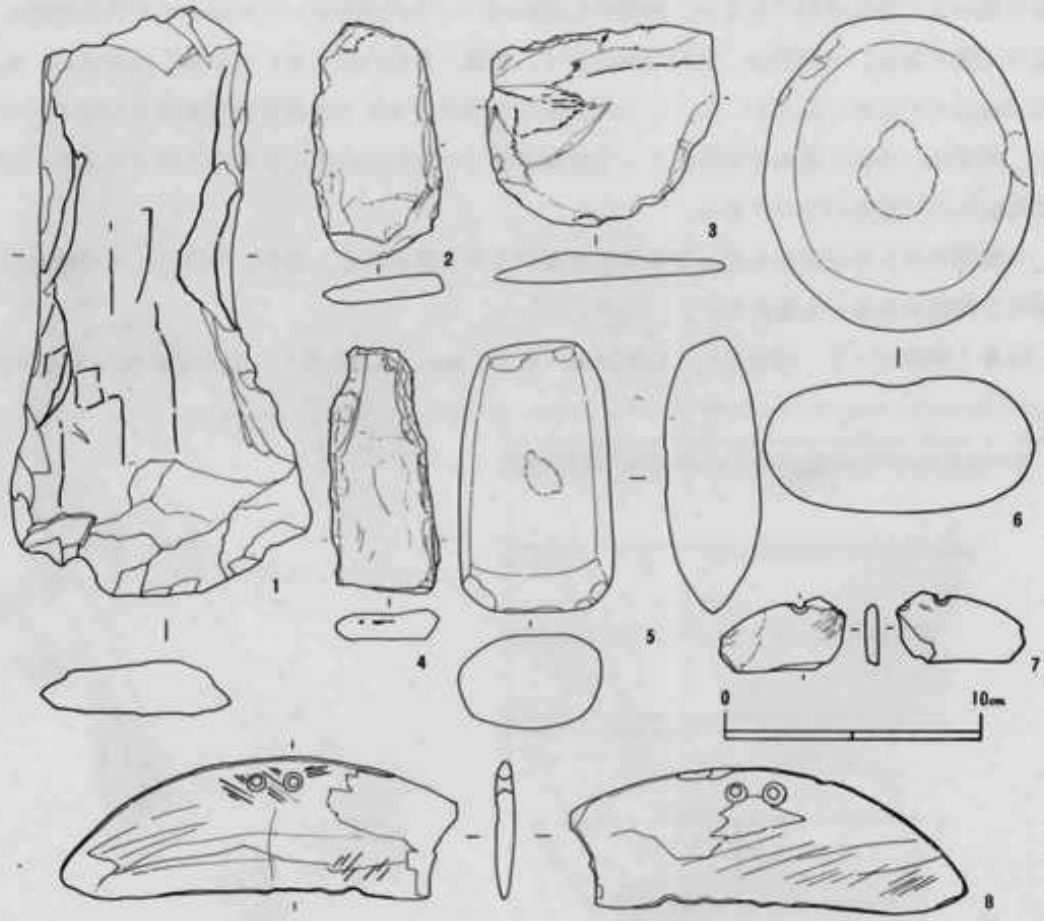
宝珠状ツマミのあり方から考えて8世紀前葉のものと思われる。

甕小破片　表面は，荒い条線状叩具で調整し，内面は同心円の叩文がみられる。

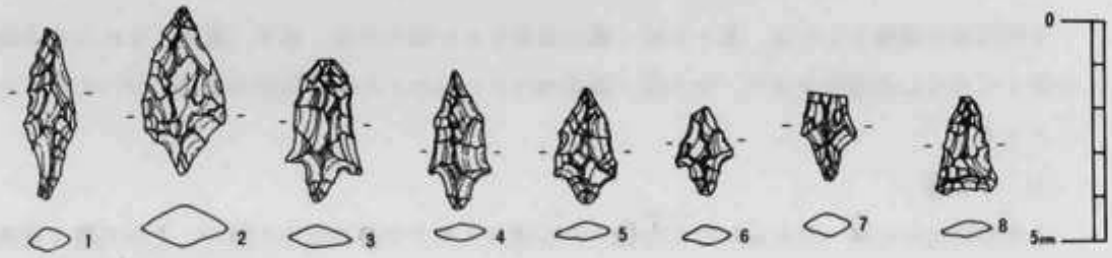
石器について

遺構に伴なって出土した石器についてはすでに述べたが，ここでは，耕作土中とか柿の木塚古墳墳丘表土層から検出されたものについて述べることにする。

凹石（挿図20－6　図版18）　北トレンチ地山付近の黒褐色土層から出土したもので，その



挿図20　石器実測図



挿図21　石鏃実測図

他の遺物は検出されなかった。長径12.3cm，短径10.4cm，中央での厚さ5.3cmを測る楕円形で，砂岩質の石材よりなる。片面中央に敲打をくりかえすことによって成形された径3.1cm－3.7cm深さ0.4cmの凹みを持ち，さらに楕円をなす周辺にも敲打痕がみられる。裏面は，平担で，磨耗痕が認められ，所謂凹石の機能とともに「敲く」「磨る」の機能もそなえた石器である。

打製石斧（挿図20－1～4　図版18）　発掘調査によって4点の打製石斧が検出された。1－3は，柿の木塚古墳墳丘表土層から検出されたもので，1は現存長23cmを計測し，粗い剥離により製作されている。4は，C1グリット表土層から検出され，長さ9.2cmを測るものである。いずれも本地域の打製石斧に通有な石材から製作されている。

磨製石斧（挿図20－5　図版18　出土地点挿図16－16）　4号住居址北方の地山上より検出されたもので，長さ10.5cmを測る。全体に丸味を持った作りで，陵は明瞭には認められない。緑色を帯びた蛇紋岩製で，ほぼ完形品である。

3　歴史時代の遺構と出土遺物

中世以降の遺構としては，墓・土拡・溝状遺構などが検出され，以下，遺構とそれらの遺構に伴って出土した遺物を述べ，その他，調査地内から出土した中世以降の遺物について述べることとする。

(1)　中世墓

1号住居址から東へ約3mはなれた地点から集石土壙が3基検出されたが，その状態と遺構の中から出土した陶片から，これらは室町前期の埋葬墓と断定した。3基の埋葬墓は，南から北へ1号墓・2号墓・3号墓とした。

3基とも，地山を約15cm掘り下げていたが，その上の腐植土の分については，永年の耕作などによってか地層的変化は認められず，従って埋葬当時の表土高も不明なので，全体の深さなどを捉えることは不可能である。

推論が許されるならば，これらの3基の墓は，埋葬時には柿の木塚古墳の崩れかけた墳丘の部分に葬ったのではなかろうか。それを，中世末～近世にかけて周囲の耕作者が少しずつ墳丘を崩して畑としていったと思われる。また，地元の集落の人々は，調査地内に墓の存在するという伝承は知らないし，地上にも何ら変化なく周囲と同じように畑地であった。

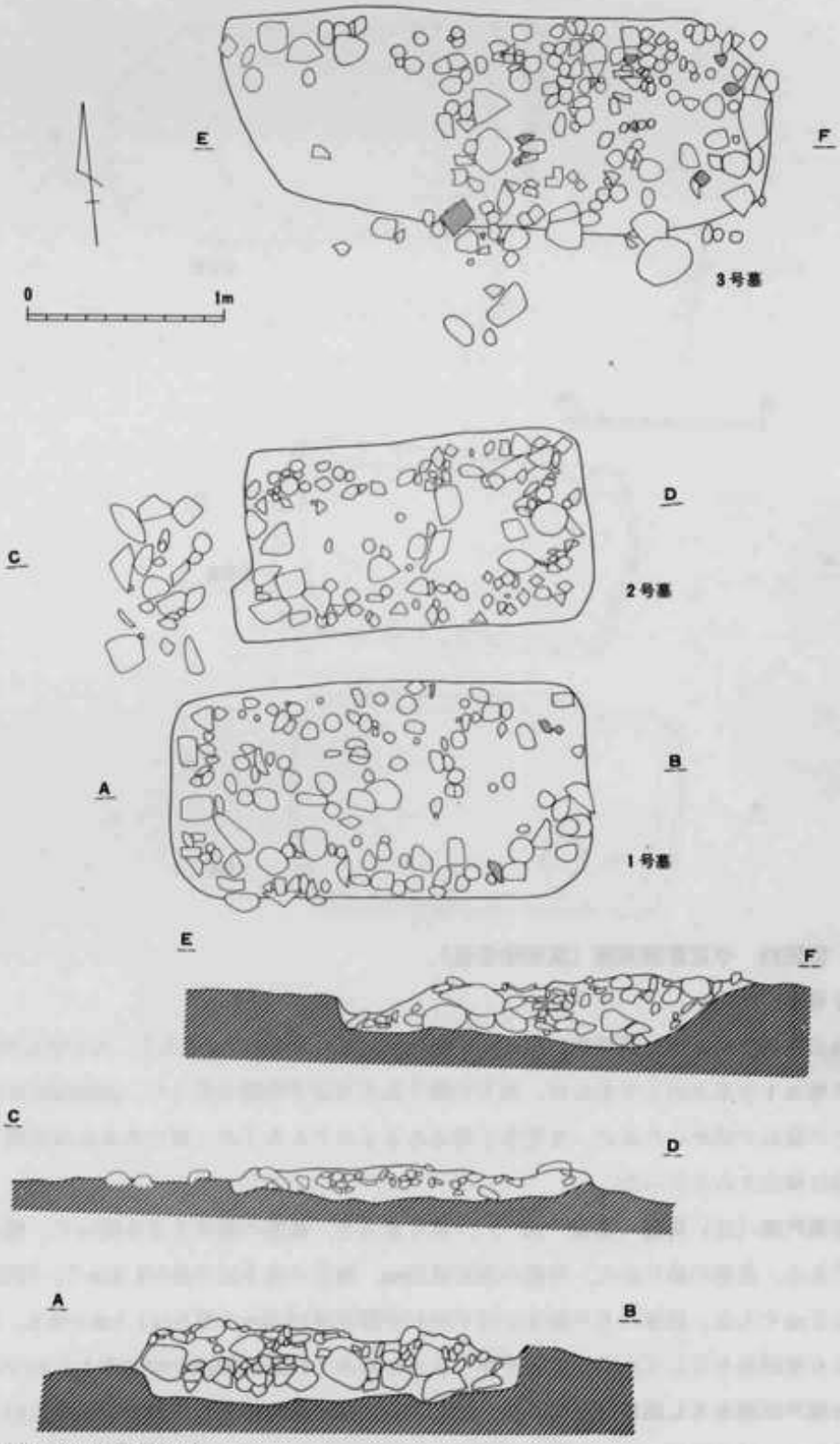
1号墓

地山の掘り込みは，長軸約1.97m・短軸約1.09m・深さ約0.15mである。そこへ大小の石が無造作に投げ込まれたのか，集石の厚みは約0.35mである。それらの石の間に陶片が混り，また，大形の巻貝(アカニシ)の残欠が1点出土した（図版19)。

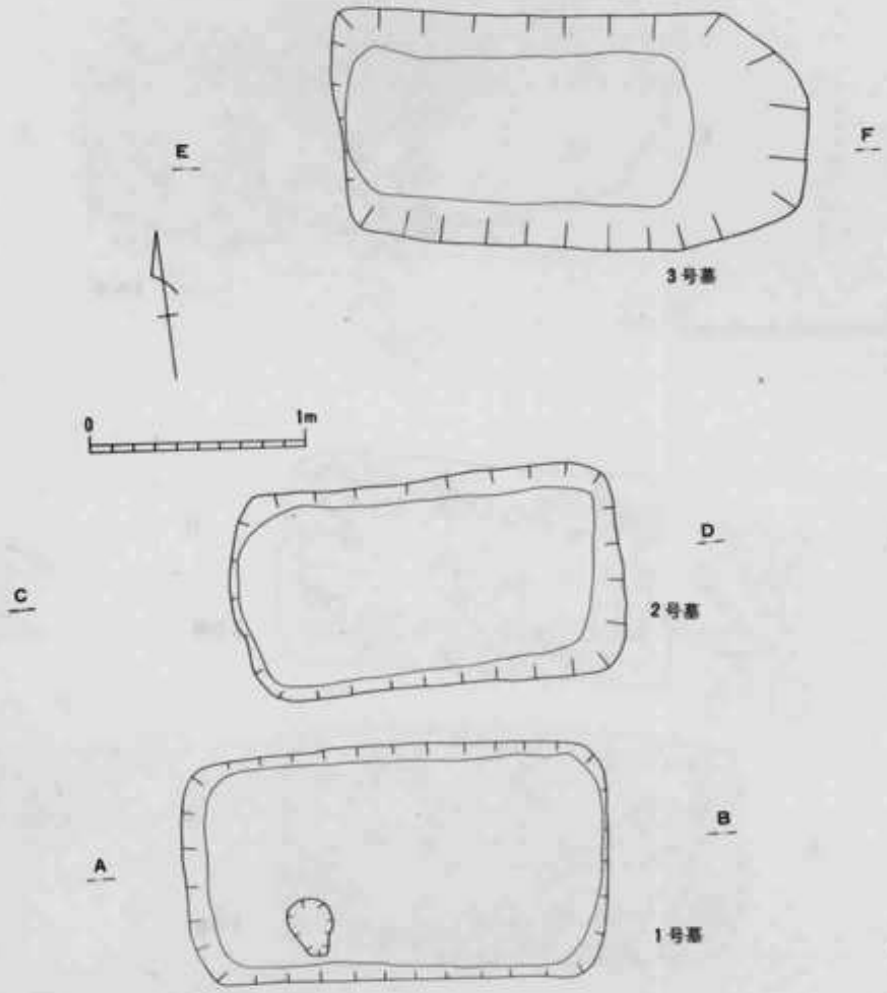
古瀬戸四（三）耳壺（図版　19　）　破片4点で全体を捉えることは不可能であるが，肩と胴に三条の櫛描条線文が施文してあり，釉調はほぼ均一で淡緑色を呈している。形態や釉調からみて15世紀初期のものであろう。

古瀬戸盤（図版　20　）　破片9点が出土している。口縁は折縁となっていて，底部の破片には獣足がつけられている。釉は淡緑色を呈しているものもあるが，かせて白くなっている破片もある。これも形態や釉調からみて15世紀初期のものであろう。

古瀬戸擂鉢（図版　19　）　5点の破片が出土しているが，釉調や胎土からみて4点は同一個体で，7条の櫛歯具（幅約2.4cm）で見込み底から口縁にかけてはね上げて施文している。現存部で計測すると，施文の角度が30°なので全体で12本つけられていたと思われる。なお，見込み底には十文字に施文されている。他の1点は，8条の櫛歯具（幅約2.2cm）で施文している。2個体とも内外に鉄釉がけとなっていて，15世紀末から16世期初頭のものである。



挿図22　中世墓実測図



挿図23　中世墓実測図（集石除去後）

2号墓

地山の掘り込みは，長軸約1.83m，短軸約0.94m，深さ0.1mである。大小の石の無作為な集石状態は1号墓と同じであるが，西方の掘り込み方は不明瞭であった。約20cmはなれて 0.5mほどの集石が認められるが，2号墓と関連あるものであろうが，何であるかは不明で，また，遺物は検出されなかった。

古瀬戸四（三）耳壺（図版　20　）　破片6点で，底部の破片1点を除いて，他は胴部のものである。底部の破片から，外面の推定径15cm，高台の高さは外面が1.8cmで，内面は0.5cm・幅は2cmである。胴部のどの部分かは不明だが推定径19.5cmで厚みは1.1cmである。釉は，濃淡のある黄緑色を呈している。釉調や作りなどからみて15世紀初頭かやや下るものであろう。

古瀬戸灰釉おろし皿片（図版　21　）　内面底部に篦で格子状に刻みを入れたおろし皿底部片である。外面底部には，糸切痕が付けられ推定径7.4cmである。

3号墓

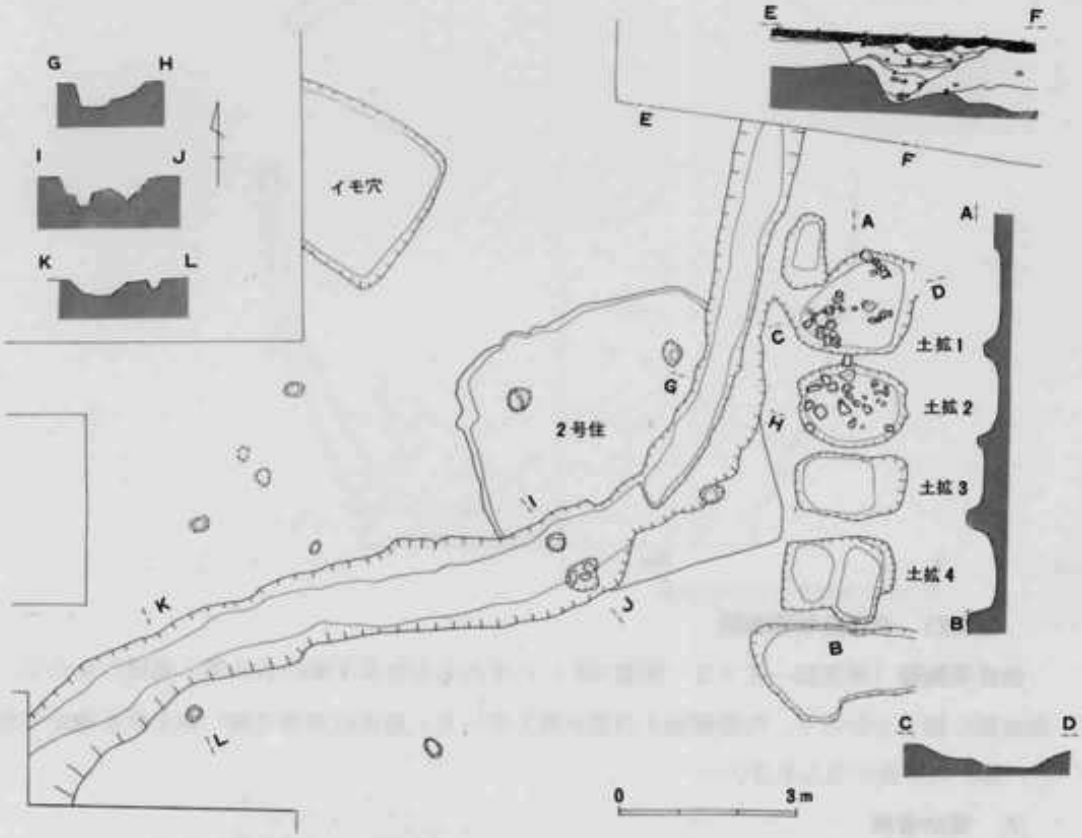
地山の掘り込みは，長軸約2.15m，短軸約1.08m，深さ約0.3mで，大小の石の在り方は，他と同様である。

常滑系甕（図版　21　）　32点の破片が出土しているが，いずれも小破片であって全体を捉えることはできないが，押印からみて鎌倉期のものと判断される。

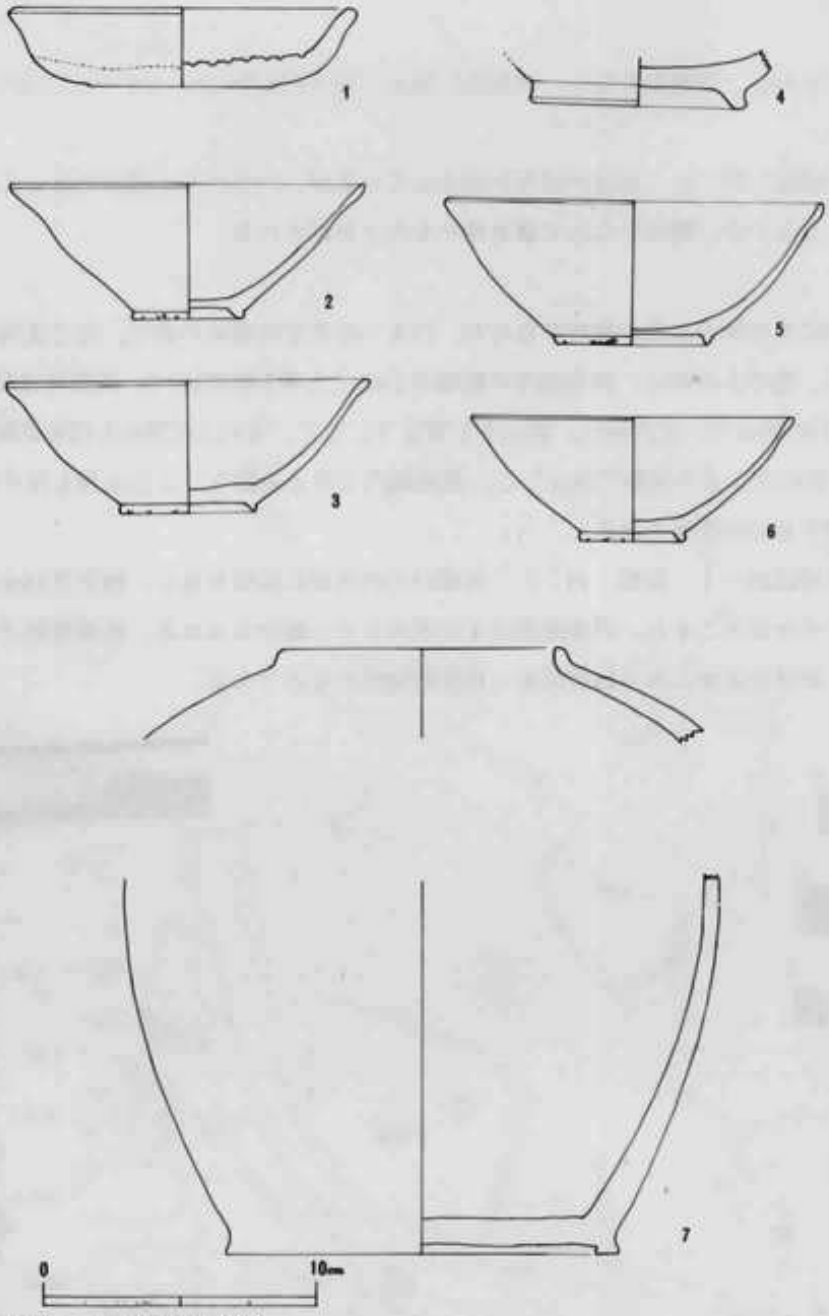
(2)　土拡

調査地点内に5か所の土拡が検出されたが，内4つは2号住居址の東で，出土遺物もないので不明である。他の1か所は，調査地内の南端の土拡（土壙5挿図15)で，調査地域内の長さ約0.9m，深さ約0.25mで，北西隅に，割おろし皿を下にして，その上に割れた白瓷系陶器4箇体体以上の碗を重ねたままの状態で出土した。調査域内で考える限り，この土壙も陶片の出土状態も何を意味するのか不明である。

おろし皿（挿図25－1　図版　21　）　古瀬戸で内外面に灰釉を施し，推定径14cmで内底に鋭い篦で格子文が刻みこまれ，内面底部に4か所のトチン跡がみられる。外面底部は糸切底のままである。形態などからみて14世紀末～15世紀初頭のものである。



挿図24　1号溝状遺構・土拡実測図



挿図25　中世遺物実測図

白瓷系陶器（挿図25－2・3　図版 22 ）いずれも白瓷系Ⅴ期の白土原1窯期のもので，内面底部に指なでがあり，内面胴部との境が凹んでいる。高台は貧弱で細い粘土紐を指圧で貼付し，粗がら圧痕が見られる。

(3)　溝状遺構

中世以降の溝状遺構としては，柿の木塚周辺の1号溝と調査地域南端の4号溝からは，出土

遺物が検出され，各々の溝がある程度どんなものか推定されるが，他は不明である。

1号溝は，柿の木塚古墳のある時期（幕末？）の墳丘と周辺耕地との境界であったろうと思われる。溝からは，古瀬戸の内耳鍋の破片（図版　22　）や，近世幕末の磁器片まで入っていた。

4号溝は，何であるかは不明であるが，白瓷末期の碗底部破片と白瓷系Ⅰ～Ⅱ窯期の碗底部破片（挿図25－4　図版　22　）が出土しているので，南北朝頃の何らかの溝であったろう。

(4)　その他の出土品

白瓷系陶器碗1点を除いては，破片であるが白瓷・白瓷系陶器・古瀬戸・常滑甕などが出土している。以上の5点以外は，小破片で白瓷末期から白瓷系陶器末期のものが多かった。

白瓷系陶器碗（挿図25－5・6　図版　22　）　挿図25－5の定形品と挿図25－6の割れて半分しかない破片とが測定できたが，他は小破片であった。挿図25－6は，径12cm，器高4.6cmの小碗といった感じのものである。内面底部に指なでがあり，外面底部は糸切痕と板状のものにのせたのか，また，篦で切ったのかその痕跡がみられる。挿図25－5は，径14cm，器高5.4cmで，内面底部に指なで圧痕が見られる。どちらも高台は細い粘土紐を指圧でつけ，糊がら圧痕がみられる。また，2点とも耕作土から出土している。

古瀬戸内耳鍋（図版　22　・　23）　破片が3点出土し，同一個体のものであるかどうかは不明であるが，1点は1号溝から出土し，他の2点は3号墓近くから出土している。1号溝から出土したのは口縁部片で，推定外径22cmで幅2.5cmのつばがある。つばは折曲げて二重にして仕上げられている。内外面とも鉄釉が施されている。

白瓷短頸壺（挿図25－7　図版　23　）　東西トレンチから出土し，底部と口縁部の破片より推定底部径15cm・口縁径10.4cmである。灰釉は底部のわずかを残して施されているようであり，その釉調は，口縁から肩へはよくのっていて淡緑を呈しているが，やや釉むらもある。胴部から底部は欠落部分が多く，少ししかのっていない。また流条化も見られる。

菊皿（図版　23　）　柿の木塚古墳の墳丘表面より桃山時代末期から江戸時代初期の菊皿が1点出土した。外面に長さ2cm，幅0.5cm，厚み0.3cmの重ね焼きした他の菊皿のひっつきがあり，また，内面底部には，トチンの跡がみられる。菊弁は篦状のもので1つ1つ切って調製されている。

V 結　語

欠ノ上遺跡の調査は，雇用促進住宅建設に伴う敷地造成工事に先立って実施したものである。同敷地内に「柿の木塚」と称する古墳が存在することにより，同古墳を発掘調査し記録保存を図ることが目的であった。しかし，墳丘残存部は，同古墳が存在しただろうと推定される墳丘底面積の一割にもみたなく，しかも西北隅の一部が残っていたのみであった。従って同古墳の規模，造営時期など正確には掌握できなかった。

しかし，同古墳の墳丘底面と思われるところから，弥生式土器後期の山中期の住居址と，古式土師器に属す土器を出す住居址3軒の合わせて4軒の住居址が検出された。その他，溝状遺構4，中世墓3と，土拡4が検出され，したがって，当調査報告書は，「柿の木塚」古墳をも含めた「欠ノ上遺跡」としてまとめた。

それぞれの遺構と遺物については各項で詳述したので，ここでは，二・三の点について述べることとする。

まず，「柿の木塚」古墳であるが，破壊が著るしく，墳丘底面の全面発掘においても，造営年代を求める直接の手がかりは得られなかった。しかし，同古墳の墳丘下と思われる所より，和泉期（5世紀代）に比定される土師器を出した1号住居址が検出されたことから，築造年代は，少なくともそれ以後と見ることができる。また，グリット方式による全面発掘にもかかわらず主体部の掘り込み等は確認されず，同墳と直接関係すると思われる須恵器も検出されなかったことから，推定ではあるが，須恵器が一般化する以前，すなわち5世紀代後半に築造年代を求めることができる。

次に弥生時代の遺構と遺物であるが，後期の山中式土器を伴う遺構が検出された。4号住居址がその一つであり，挿図11－3，4は，同一個体の台付甕形土器である。床面直上より検出されたもので，口唇部には刻み目が施され，山中式土器の甕に比定される。他の一つは，挿図11－6～8の土器，挿図20－8の石庖丁を出した3号溝状遺構である。7の器台形土器，6の高坏形土器口縁部は，共に山中式土器の特徴をよく備えており，可児川流域では，初めての弥生式土器の検出であった。この他，耕作土中からは，中期の貝田町期に比定される土器が検出され，可児川中流域への弥生文化の伝播が中期に遡ることが明らかとなった。可児川流域に根づいた弥生文化が，以後どのように展開し，丘陵を隔てた久々利銅鐸出現へどう発展するかが今後の研究課題の一つである。

古墳時代の遺構・遺物は，本調査において最も数多く検出された。先の「柿の木塚」古墳を

初め，住居址3軒が検出され，2号住居址からは，かなりまとまった土器が出土した。挿図9に示した9個体で，元屋敷期とされる土師器に類似する。しかし，元屋敷期に特徴的なパレススタイルの壺は，挿図9－2の破片が検出されたのみであり，また「S」字状口縁を持っ台付の甕形土器は，床面上よりは伴出しなかった。「S」字状口縁甕形土器は，近年当地域でも報告例が増加し，町内では，宮之脇遺跡（註2），北割田遺跡（註3）で出土している。当遺跡においては，元屋敷期に類似する土器を出した2号住居址からは検出されず，耕作土中から口縁部破片がわずか3片（挿図18）検出されたのみで，その出土は著るしく少ない。この違いが時間的なものであるかどうか今後の問題としてゆきたい。

いずれにせよ，可児川中流域において，特に元屋敷期から和泉期にかけての古墳時代前期集落址が発見されたことは，発生期の古墳がいずれも当遺跡から1km以内に分布することを考えると，きわめて意味が大きく，今後の研究課題である。

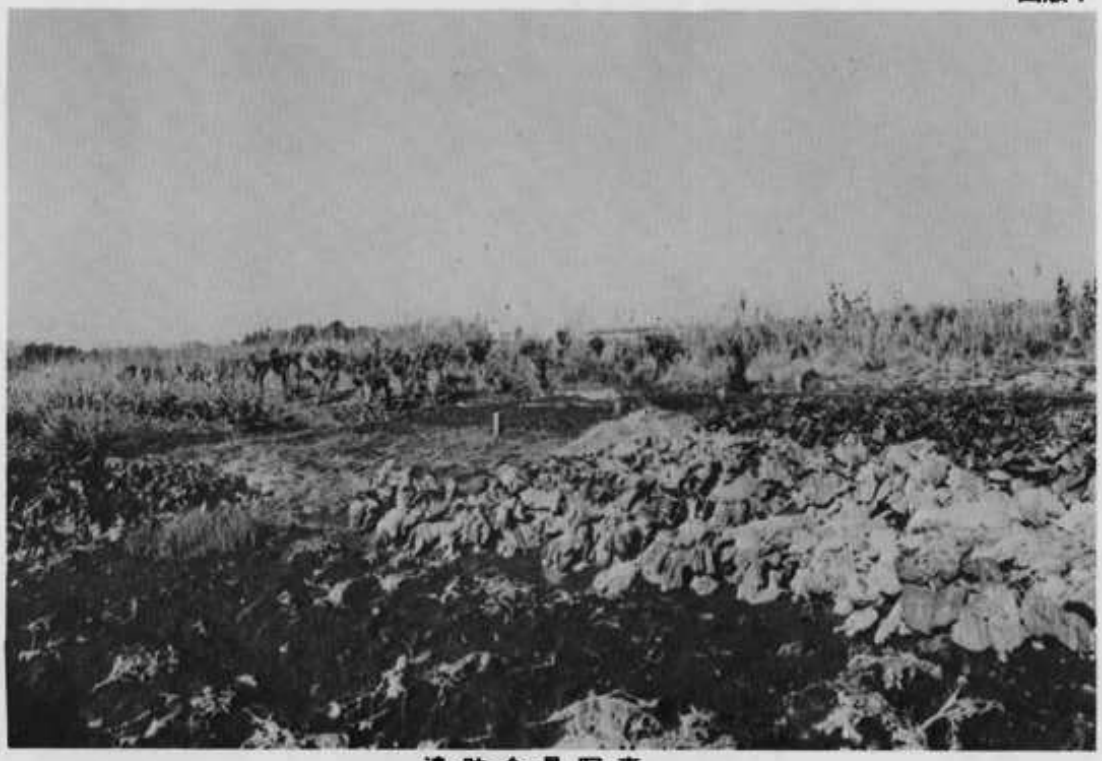
註

1．大参義一　「弥生式土器から土師器へ」　名古屋大学文学部研究論集XLVII　1968
2．可児町教育委員会　「宮之脇遺跡発掘調査報告書」　1976
3．可児町　「可児町史」　通史編原始　1980

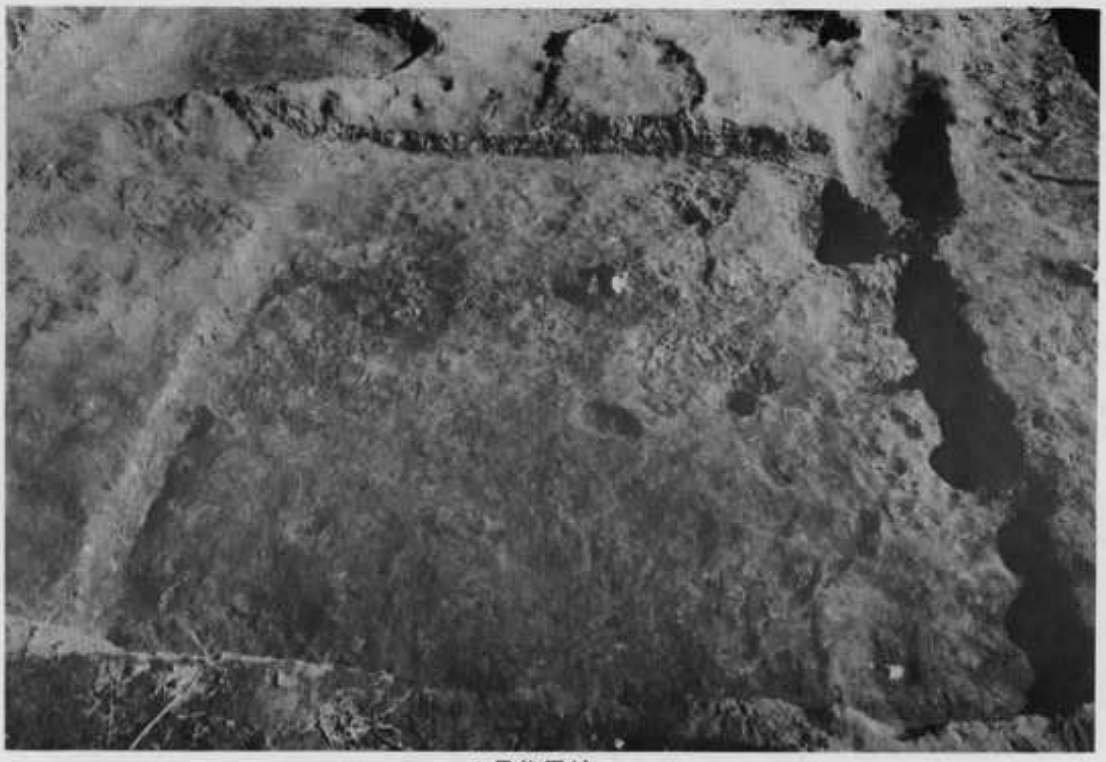
参考文献

紅村　弘　「入門講座・弥生式土器－東海西部－」1～4　考古学ジャーナル112，116，122，125，　1975～1976
澄田正一外　「新編　一宮市史　資料編二」　一宮市　1967
澄田正一・大参義一外　「朝日遺跡群第一次調査報告」　愛知県教育委員会　1975
紅村　弘外　「牧野小山遺跡」　美濃加茂市教育委員会　1973
吉田英敏　「南野遺跡発掘調査報告」　美濃加茂市教育委員会　1976
楢崎彰一外　「宇田遺跡発掘調査報告書」　岐阜市教育委員会　1975

Ⅵ 図　版



遺跡全景写真



1号住居址

1号住居址遺物出土状態（貯蔵穴）

1号住居址　遺物出土状態（炉址）

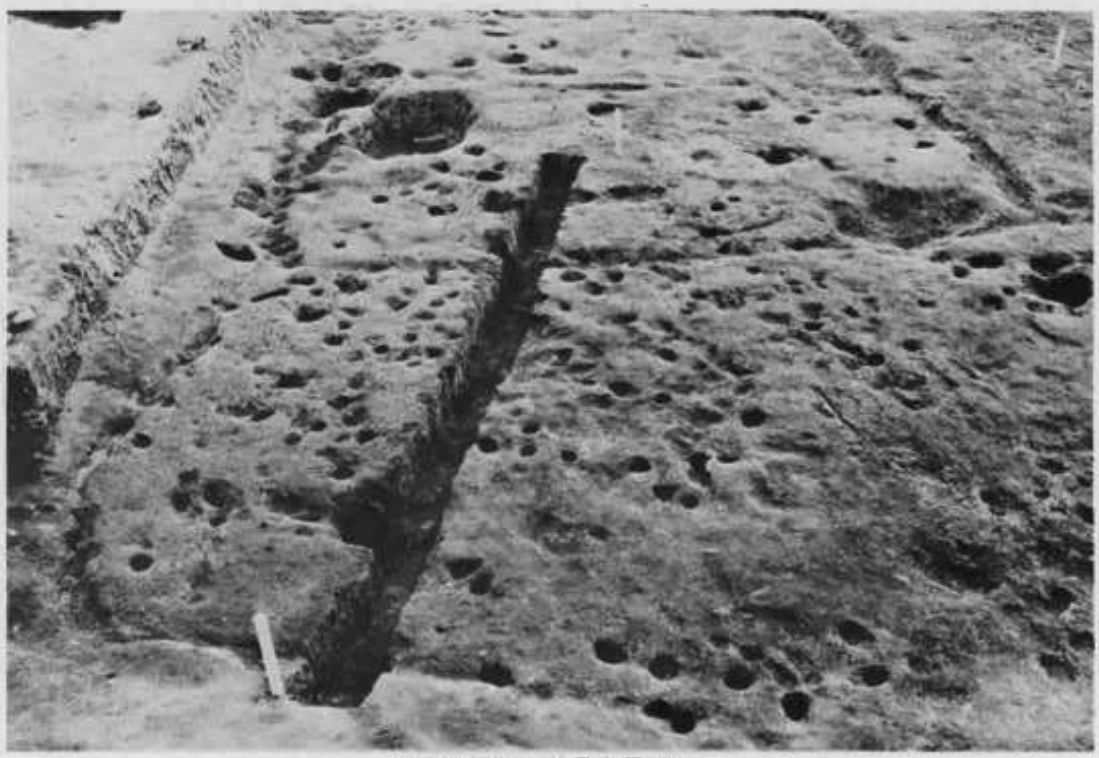
2 号住居址

2 号住居址　遺物出土状態

2 号住居址　遺物出土状態

3 号住居址

4 号住居址



3 号住居址・4 号住居址

柿の木塚古墳近景（調査前）

葺 き 石

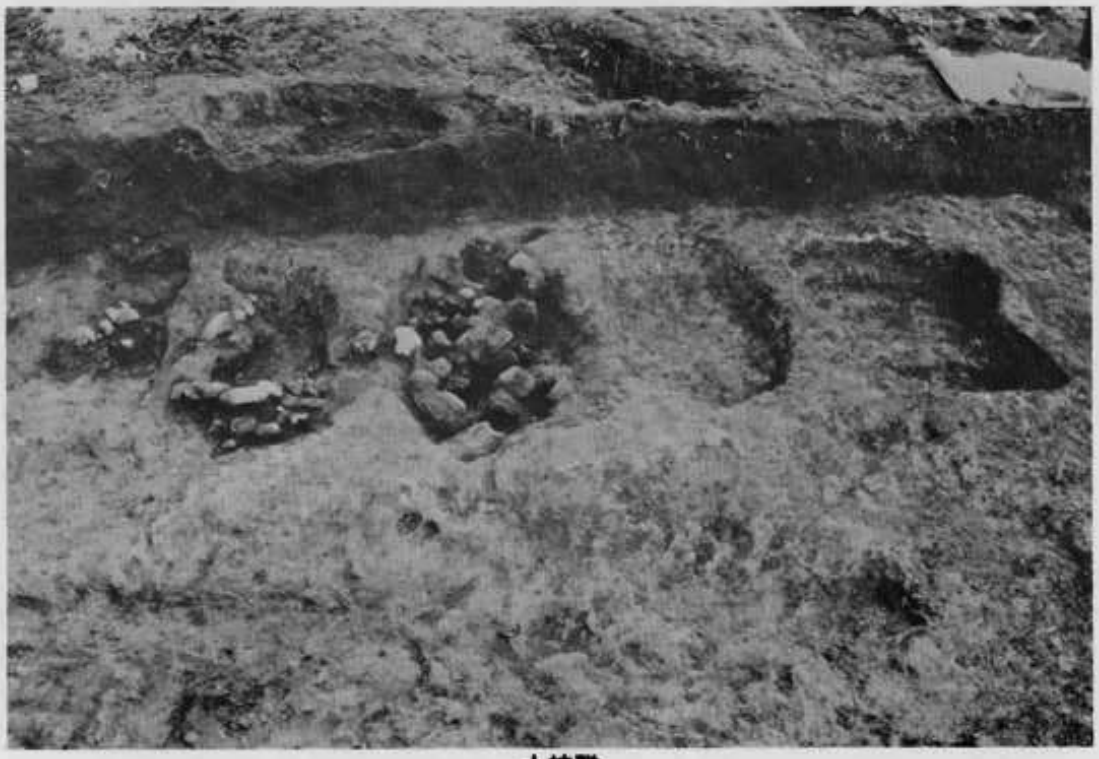
中 世 墓

1号墓・2号墓断面

3 号墓断面

集石除去後の中世墓

3号・4号溝状遺構



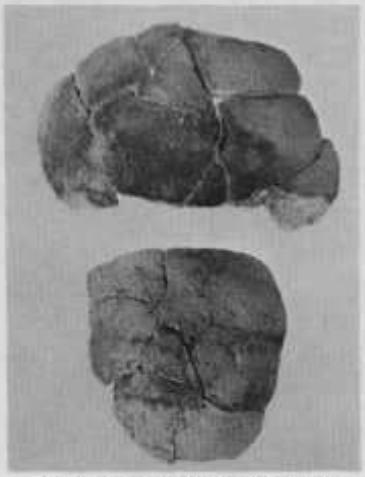
土拡群

縄文土器

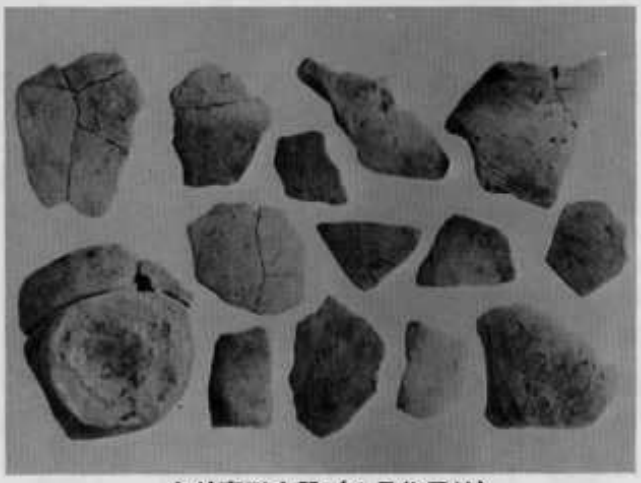
甕形土器（1号住居址）

高杯（1号住居址）

甕形土器1（1号住居址）



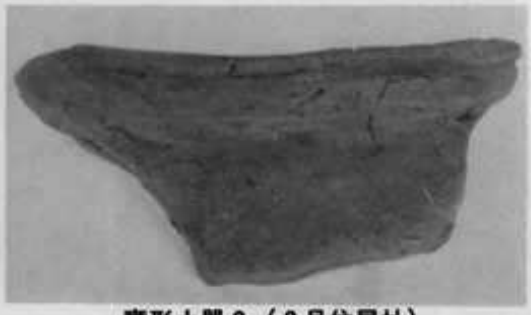
甕形土器2（1号住居址）



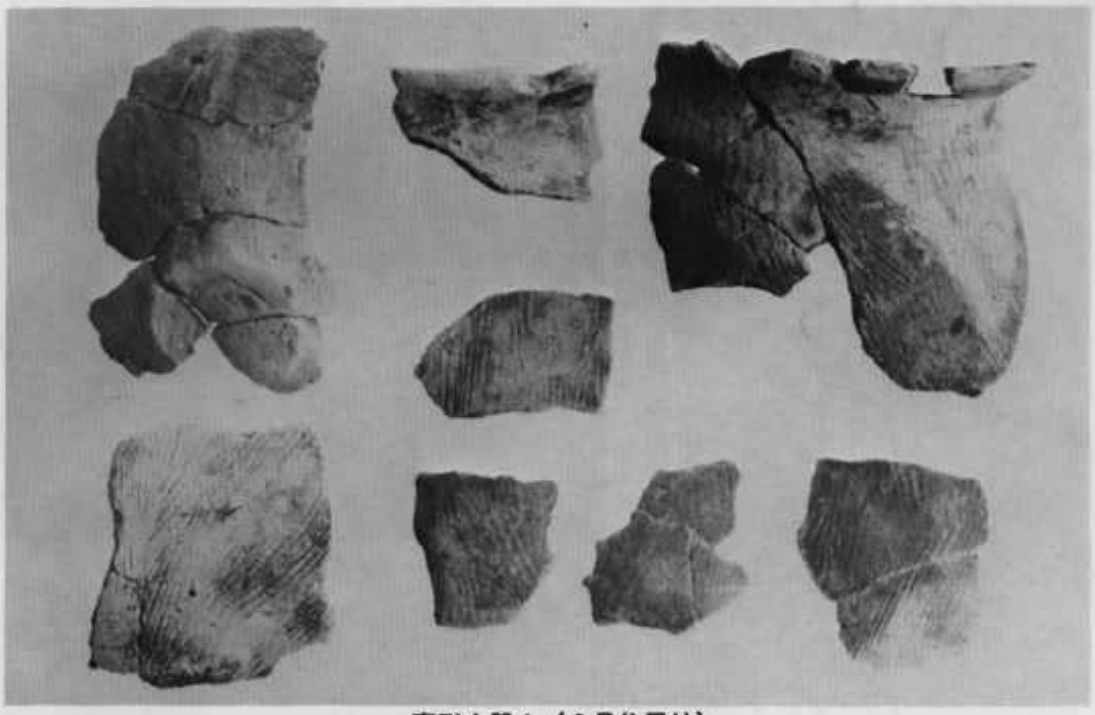
台付甕形土器（1号住居址）

壺形土器１（２号住居址）

壺形土器２（２号住居址）



甕形土器２（２号住居址）



甕形土器１（２号住居址）

高坏形土器１（２号住居址）

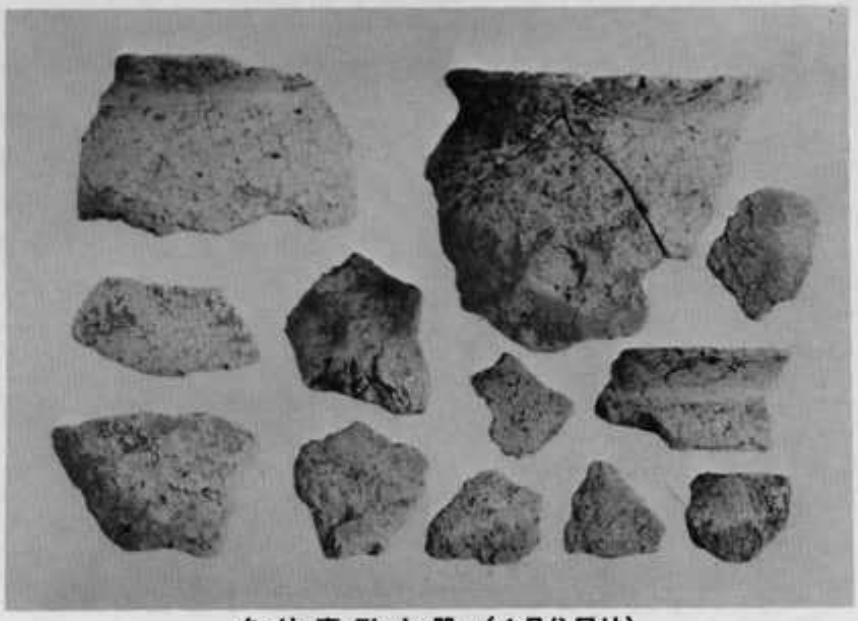
器台形土器１（２号住居址）

器台形土器２（２号住居址）

高坏形土器２（２号住居址）

壺形土器
（3号住居址）

甕形土器
（3号住居址）

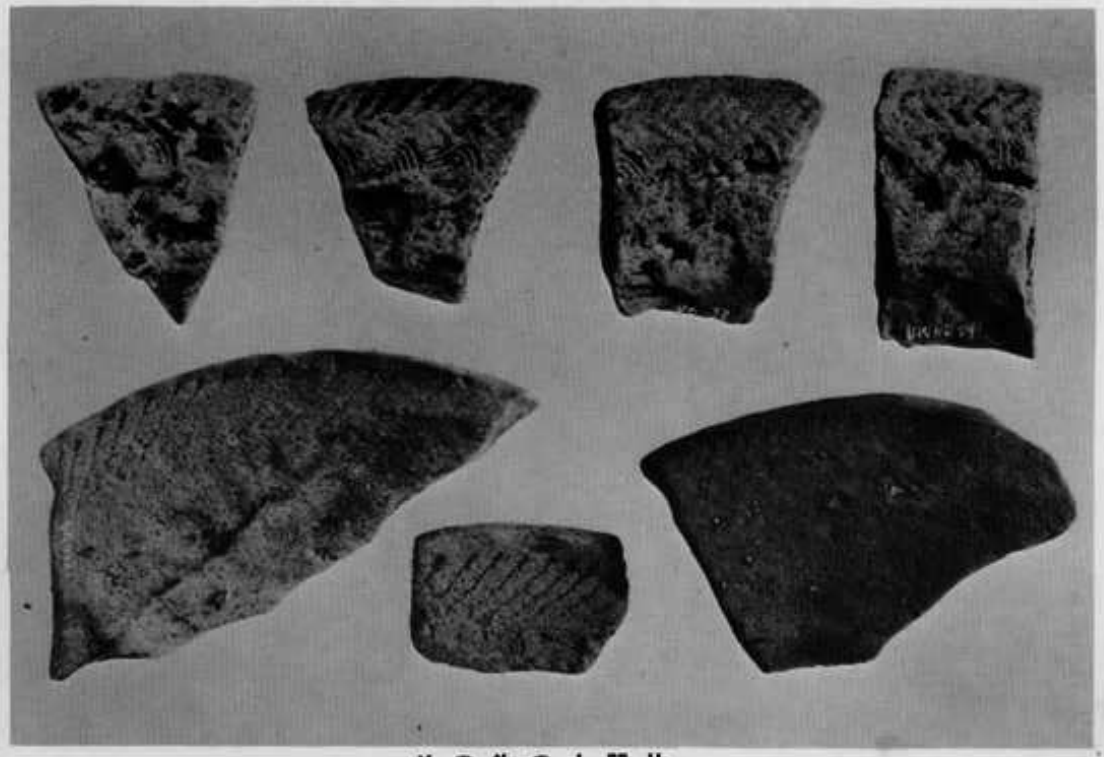


台付甕形土器（4号住居址）

長頸壺形土器

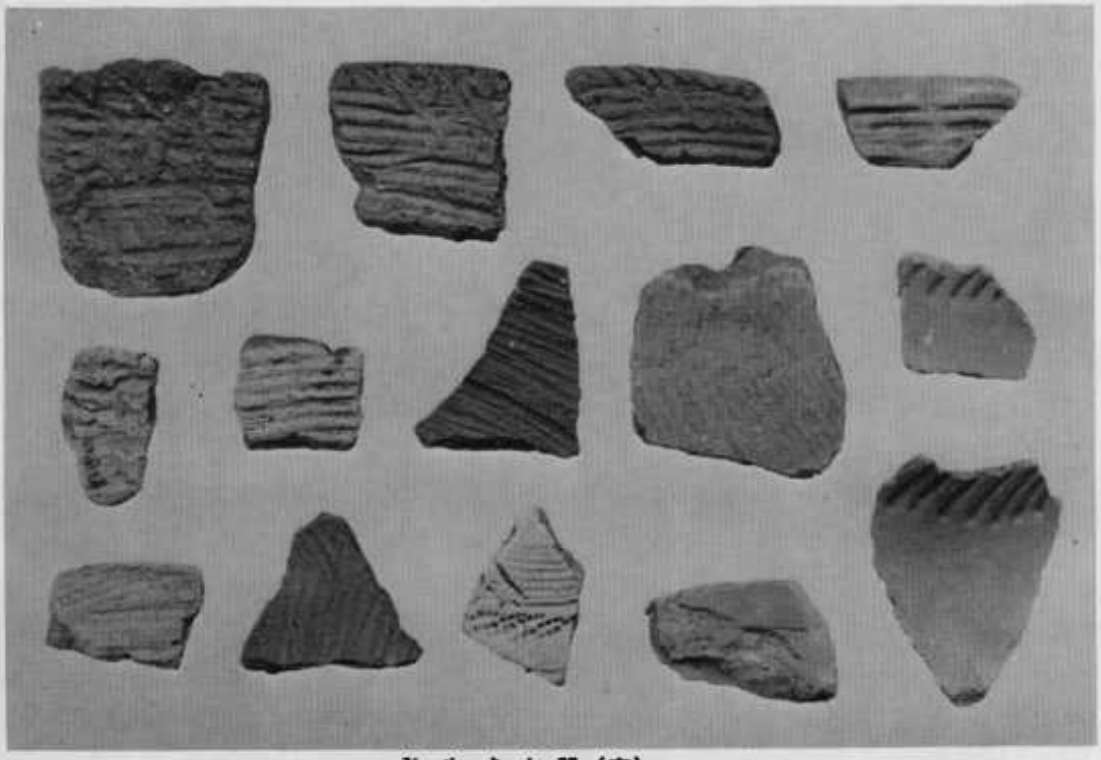
器台形土器

3号溝状遺構出土土器



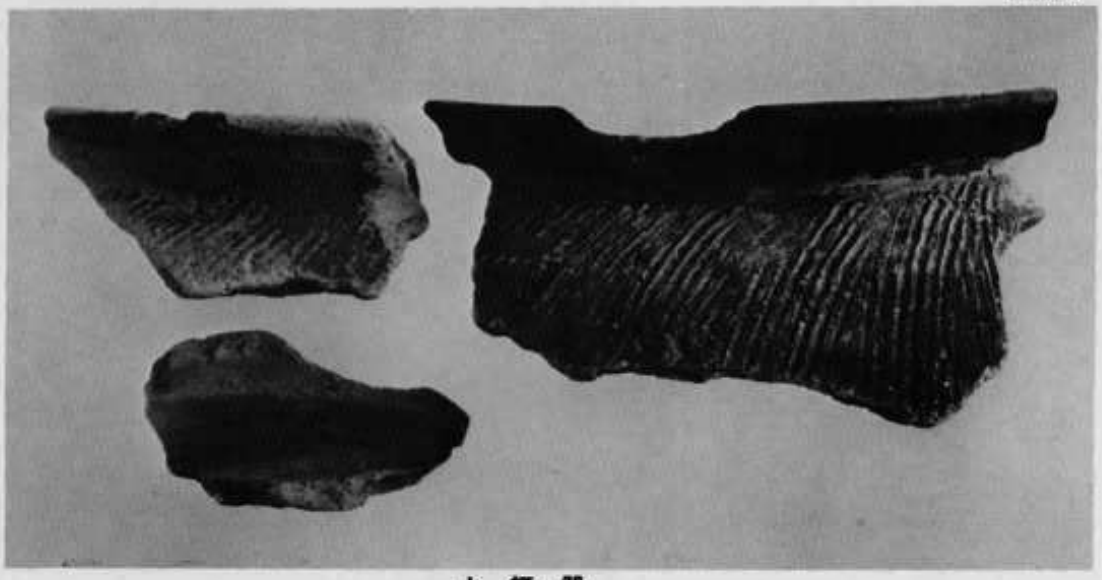
その他の土器片

その他の土器片

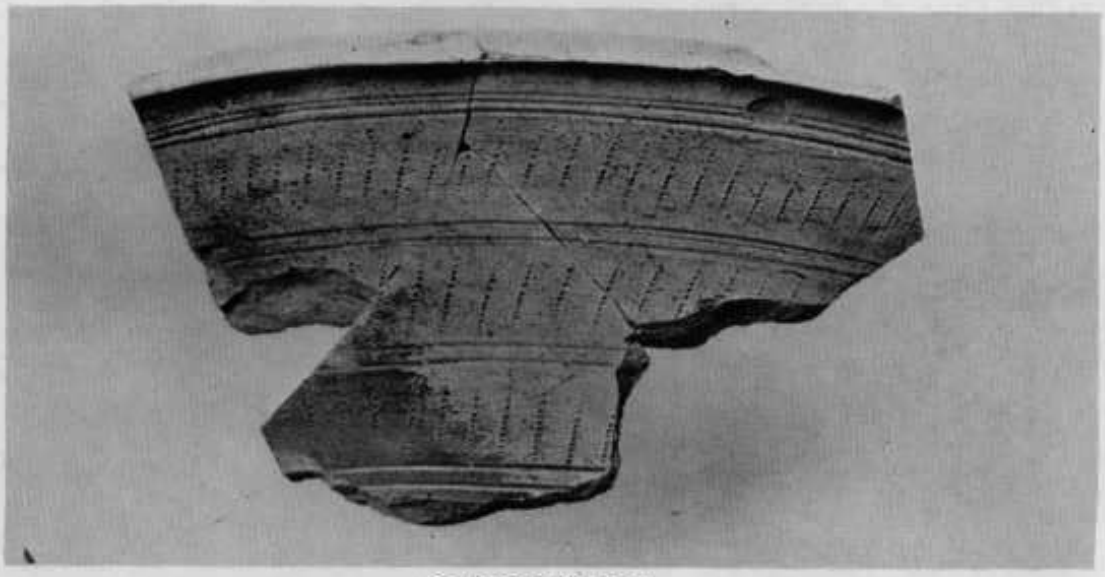


弥生式土器（表）

弥生式土器（裏）



土 師 器



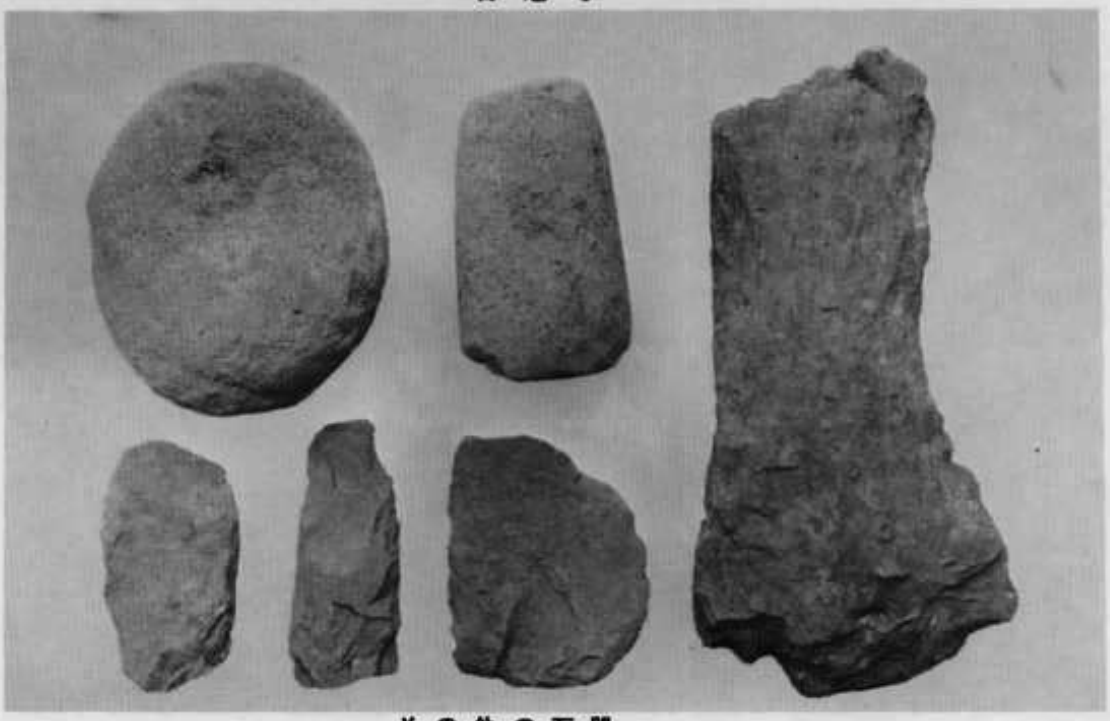
須恵器広口壺

須 恵 器

石　鏃

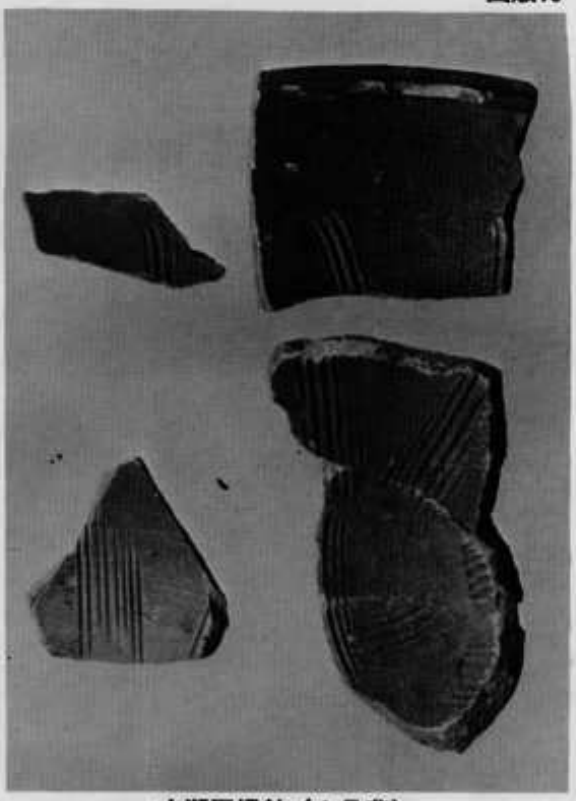
石　庖　丁

石　庖　丁



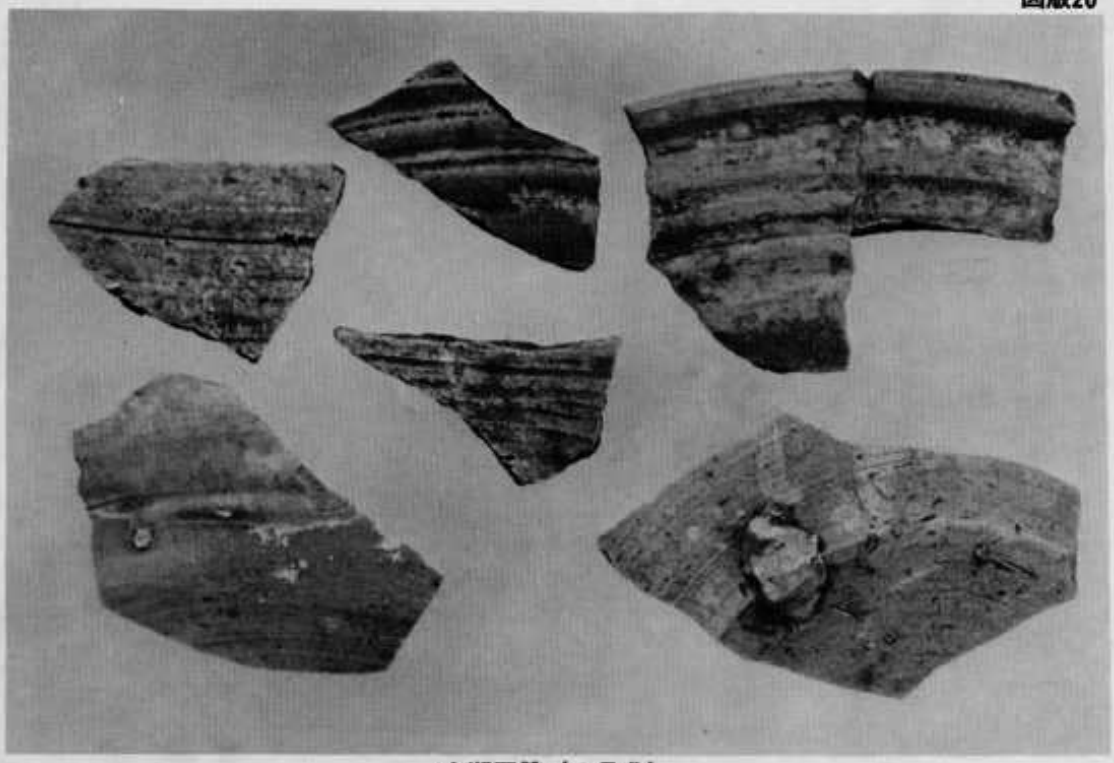
その他の石器

アカニシ（1号墓）

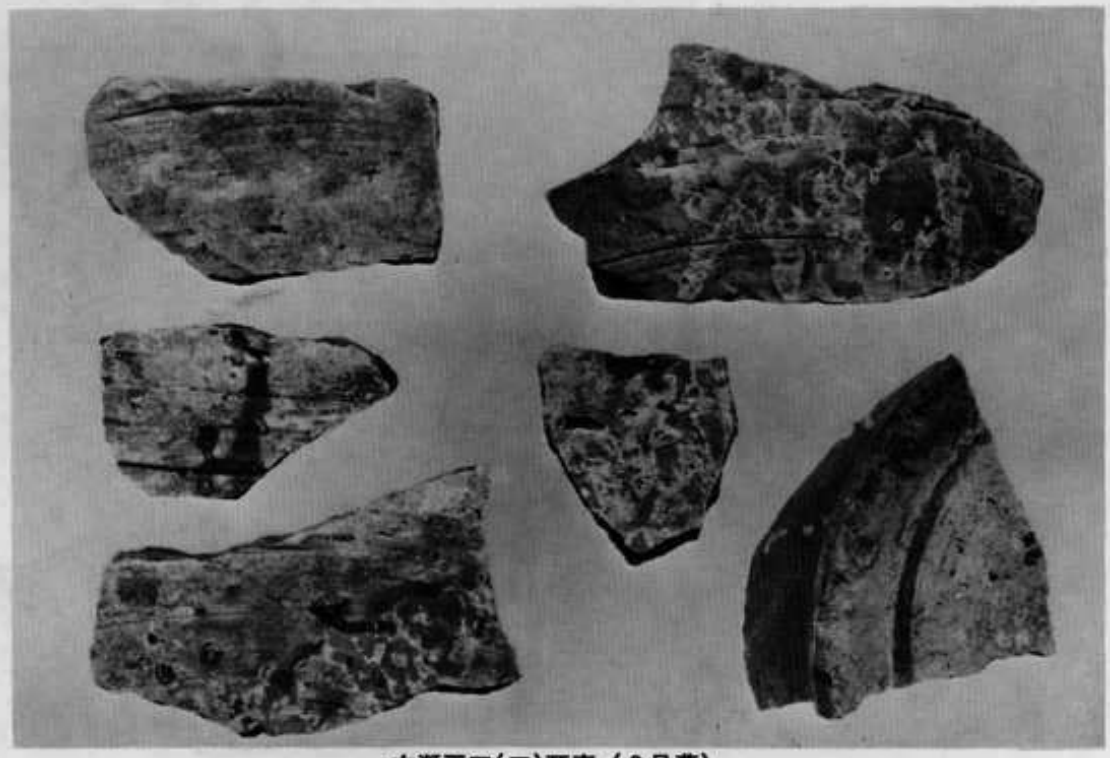


古瀬戸擂鉢（1号墓）

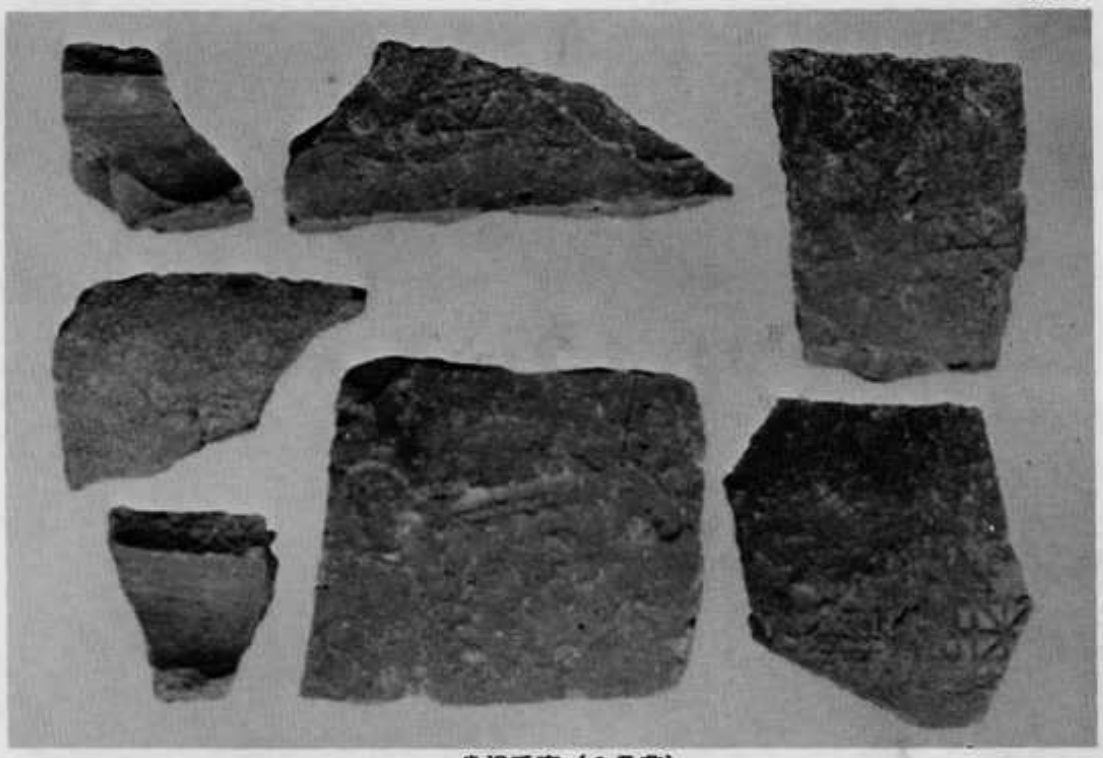
古瀬戸四(三)耳壺（1号墓）



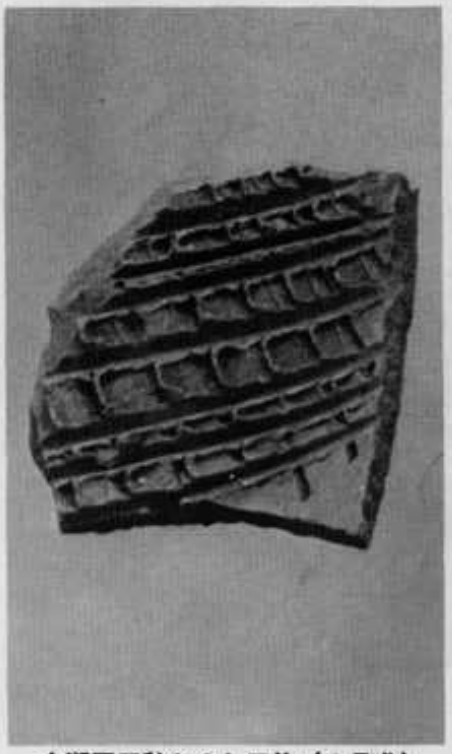
古瀬戸盤（1号墓）



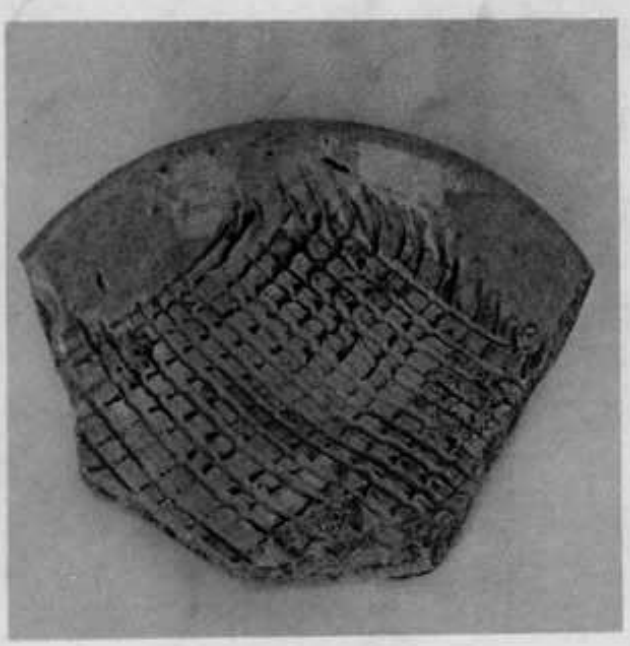
古瀬戸四(三)耳壺（2号墓）



常滑系甕（3号墓）



古瀬戸灰釉おろし皿片（2号墓）



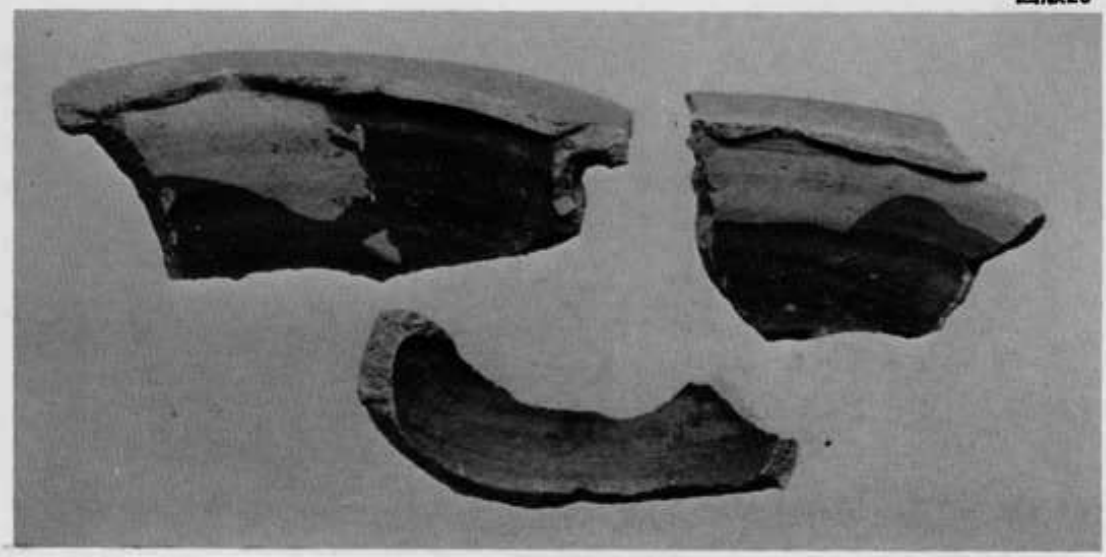
おろし皿

白瓷系陶器碗（土拡出土）

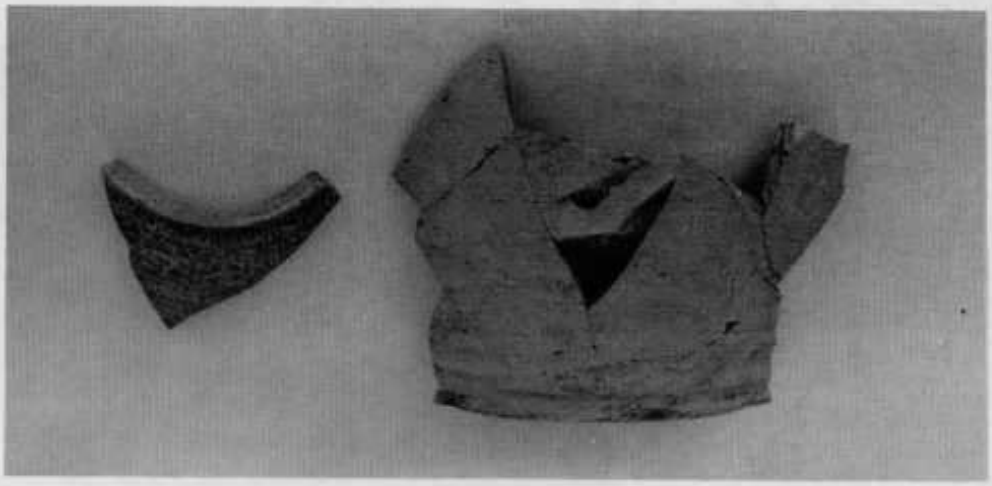
白瓷系陶器碗

白瓷系陶器碗（4号溝状遺構出土）

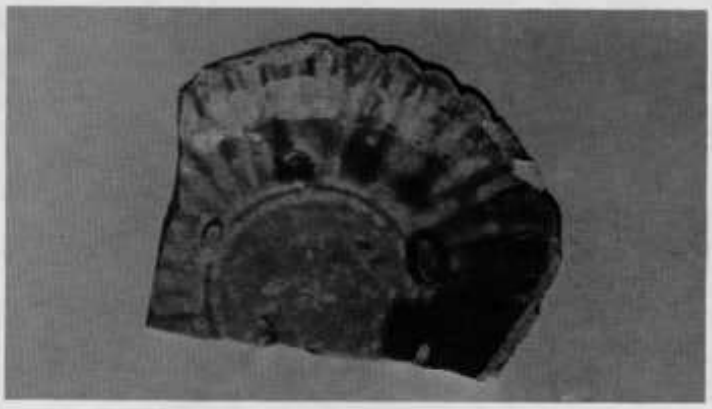
古瀬戸内耳鍋（表）



古瀬戸内耳鍋（裏）



白瓷短頸壺



菊　皿

欠ノ上遺跡発掘調査報告書

昭和54年３月25日　印刷
昭和54年３月31日　発行

発行　可児町教育委員会
岐阜県可児郡可児町広見373-1
☎(05746)2-1111㈹

印刷　可児タイプ
岐阜県可児郡可児町今渡1619の178
☎(05746)2-0588